

329
145

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



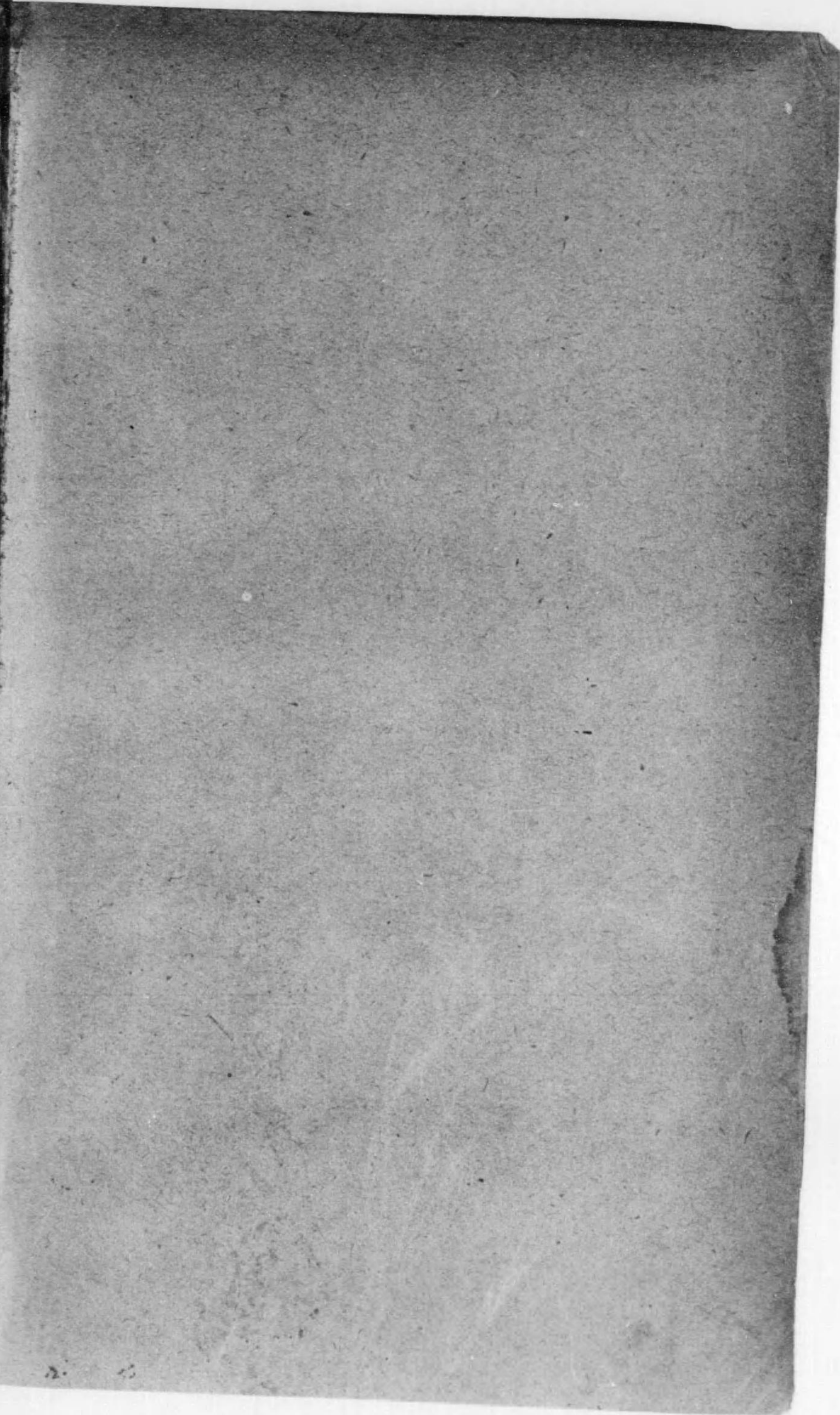
829
145



小説

家

大
い
の
ソ
レ
ハ



小説
家

稻岡奴之助著

大正
1.9.5
内交

家

稲岡奴之助著





Illustration by
Mitsumasa



家説

政治的結婚

稲岡奴之助着

【壹】

月の好い一夜であつた。

午後十時を過ぎた寂しい向島の堤を、言問團子の方から手を引合

ふやうにしながら、無言で歩いて来る若い男女があつた。

甘いやうな、人を酔はすやうな強い葉櫻の薫りが、そよ／＼と吹

く川風につれて、心の底まで浸込むやうに匂ふた上汐時の河水が

岸の石垣を洗ふて、トブンの、トブンの、と緩い眠たいやうな音を立

てゝゝあつた、対岸の今戸花川戸邊りの家々が、薄墨で隈取つたやう

で、川下の方から静かな船聲が聞けた。

←家→

三圍神社の華表前まで来た時、女は全く人通りの絶えたのを見て、「ぢや貴郎何うあつても奥様お貰ひさなるんですね」と屹と男を瞻入つた。

男は酒氣を帯びた聲で

「は、未だ那麽こと云つてる、そりや妻を貰ふにや貰ふんだが、先刻からも云つた通りで、いくら妻君を貰つたからつて、龍さんを袖にする事は断じて仕ない」

「そりや爾うでせう。けれど妾何だか……」

と聲には大分怨みが響いてゐた、
「何だかつて、あゝ分らないね龍さんは、だから今日、出悪いところを斯うして二人で出て来ていろく相談したんぢやないか、僕だつて何も龍さんといふ情婦があるのに、殊更に好んで他から妻を迎へるんぢやない、だけれども其處が世間の義理といふもんで、周囲の事情が何うしても折田の娘を貰はなければ

ならない事に成つてるので、僕だつて涙を呑んで結婚するといつたやうな次第さ」

「それぢや愛のない結婚をなさるのね」

「勿論、爾うですとも、愛も紺も甚麽もない、僕の愛情は龍さんといふ人に残らず灑いで了つたんだから、いや目下頻りに灑ぎつゝあるんだから他人に向つちや零なんです」

「まあ、旨いこと」

「美味いか不味いか僕の言葉に偽りは無い、しかし君も知つてる通りで今僕が折田の娘を貰へば、五千圓といふ持參金を持つて来る、口でこそ五千圓だが、今の僕の境遇では實に大金で是れだけあれば一時此場が凌げやうてねもんで、詰り一種の政略的

さ、は、は、は」

「悪い方ね、貴郎は」

「は、は、悪いと云はれたつて、何と云はれたつて、背に腹は換へ

られないといふ諺もあるから、僕のやうな者のところへ五千圓の持參金を持つて来てやらうといふ篤志者のあるを幸ひ其金を一時負債の方へ埋めて、會社の方の首尾を合せて置かうと思ふのだ、爾うすりや、この堀川清造も襪襦を出さずに、立派に紳士の體面を保つて行く事が出来るが、現状のまゝでは何日何時お臂に火が點いて来るかも知れないので、愛情ごころの問題ぢやない」

「ですけれど貴郎、貴郎は立派なお家もあれば、澁谷に彼様な廣大な地所も」

「無益々々、そりや龍さんが一を知つて二を知らないんだ、今年家だつて澁谷の地所だつて、疾くの昔に抵當に入つてゐて、年々その利子を拂ふだけでも容易な事ぢやない、はゝゝ」

「まあ？」

「何うだ龍さん、斯う聞いちや流石の龍さんも愛想が盡きたらう、はゝゝはゝゝ」

男は急に立ちどまつて、袂からマッチを出してパツと葉巻莖に火を點けた。

【貳】 水 尅 火

酔つてゐるからでもあらうが、堀川清造の言葉には一として誠實がない、男子盛りの三十前後といふ年齢をしながら、頭の上から足の爪先まで堂々たる紳士の扮装をしながら、云ふ言が什麼も薄ッぺらだ、賤しい心の底が明々と見透いて、流石の女もその薄情に驚いて、酷い人だと思つた、けれど、その酷いのは新に來る妻君に對してだけで、自分には眞逆爾うでもあるまいと思直した。

而して二人は蟻の這ふやうに歩いてゐる。

「何うした龍さん、否に考へ込んだぢやないか」と清造は女を覗くやうに見た。

「は、考へてますの」

「何を？」

「妾の身の上をですわ」

「君の身の上、は、詰らない、何も其様な事を考へる必要はな

い筈だ、此處に堀川清造といふ男がチヤンと付いてゐる、尤も

聊か御不足かは知らないがね、は、は、は、」

「不足なんて其様なことはないんですけれど、口でこそ其様な旨

い事はばかり仰しやるもの、愈々奥様がおいでに成つて見ると、

其處は人情ですからね、たとひ愛のない結婚をなさつたにし

て、奥様の方では夢にも其様なこと御存じないんだから、何處

までも貴郎を大切になさるでせうすると貴郎が不知不識その愛

情にほだされて、心から奥様をお愛しなさることになるのは見

ぬ透いてよ、爾うなつた曉の妾は何うでせう、一方は正式の結婚をした奥様、一方は日蔭者でせう、」

「愚、愚、愚の極だ、其様な考へをするのは詰り取越苦勞といふ

もので一顧にも値せん、は、は、は、」

「ですけれど、日蔭者に相違ないわ、奥様のおいでなさらない今

だつて矢張り日蔭者ですもの」

「何故？」

「爾うちやありませんか、貴郎が本統に妾を愛し妾を信じて下さ

るなら、恚罵談のない中、疾くに妾を奥様にして下さるんでせ

う、其れを爾う仕て下さらずに、恚罵ごことになる、といふのは、

矢張り其處には底があるのでせう」

「いや爾ういふ理由ぢやない、僕には麻布に居る兄もあり母もあ

ることは君も能く知つてる筈だ、その母や兄が君を妻にするこ

とには不同意を唱へるんだらう、なあに、自分の結婚に就て自

己の意志を他から左右しられぬやうな、其れほどまでに意氣地の
 のない僕でもないが、兄には今まで随分迷惑を懸けてゐるので、
 今一息といふところを、押切つて自己を主張する事が出来ない
 といふ、情けない境遇なんだ。だから君とも合意の上で、表面
 は小間使として君を家へ入れ、事實は夫婦同様の生活をして來
 たんぢやないか、何うです龍さんこれでも僕が疑がはしいかね」
 「爾うでせう、表面はお小間使でせう立派な日蔭者ですわ」
 「爾う云や爾うだが、僕には僕の考へがあるつて、妻を迎へや
 うが何うせうが、龍さんを見捨てるといふ事は仕ない、僕は疾く
 に龍さんと結婚しやうと思つてたんだが母が舊式な頭腦を持つ
 てゐて、曾て僕が龍さんの事を話した時に、僕が一白水星で龍
 さんが九紫火星だから、水尅火の理で大不吉だから、決して夫
 婦に成つちやならないなんて、御幣を擔いで頭張るのさ、其れ
 でついで、躊躇してゐる中、今度母の方から五千圓の懸賞付と

いふ妻君を持ち掛けて來たので、丁度財政大紊亂の場合だから
 其の五千圓を利用して一時の急場を凌いでやらうといふ考へを
 起したのさ、斯う見わたつて策士と云はれた堀川清造だ、手段
 や方法は何程もある、三月と半年の間には立派に追出して丁う
 から安心するが可い、は、は、は」
 清造は得意氣に胸を反らした。
 二人は何時の間にか、徳川邸の前を通り越し枕橋を渡つて札幌
 ヒールの横を歩いてゐた。

【参】 親孝行

葉櫻の蔭になつてゐた女の姿は只背丈がすらりとして色が白いこ
 ばかりで、服装も縹緞も人目に入らなかつたが、聽て吾妻橋を渡
 つてパツと明るい淺草へ來ると、細面なつんと鼻の高い、而して

眼元に一種妖艶な愛嬌を湛へた、華美な服装をしたお龍のハイカラ扮装が人目を惹いた。

お龍は今までの話しは最う忘れたやうに、洋傘を片手に清造と擦れくりに歩きながら、

「鳥渡貴郎、御覧なさいね、呂昇がかかつてよよ」と東橋亭の前で立停つた、

「貴郎少し聴いて行きませう、未だ早いから」

「最う十時に餘程廻つてる、入つたつて直ぐハマだらう」

「呂昇だけ聴けば可いわ、今丁度真打の呂昇が高座へ上つてる處でせう、ね貴郎、早くさ、早くなさいよウ」

「でも大分遅いから……」

「何うせ遅くなり序ですよ、また來やうつて大變なんだから、ね貴郎、早くさ」

お龍は蓮葉に清造の手を捉り、引張るやうにして寄席へ入つて了

つた。

この蓮葉な舉動が、覺えず通行人の目を聳てしめた、見た處年頃

二十一二人の人品風俗が、上品なやうな點もあれば頗る下卑た處も

あつて、女學生上りとも見えない、さりどて藝妓や酌婦の上りとも

も見えない、頗る不得要領な素性の知れぬ人物と見られた。

恚慥怪しい婦人さ、那麽相談をしてゐた堀川清造といふ男は甚麽

人物であらう。

清造は高等商業學校出の秀才で、今は△△生命保險會社の會計課

長を勤め、實兄堀川賢二といふは麻布の筆筒町で質商を営み、自

分は學校を卒業すると同時に、兄から分けて貰つた澁谷の地所と

三萬餘圓の電鐵株と、別に三四千圓の正金を握つて赤阪氷川町

に一戸を構へ、日々京橋の會社へ通勤して、中流以上の生活をし

てゐるのであつたが、年齢が弱いたためか、社會の誘惑に打勝つと

いふ克己心に乏しいためか、兎角素行が修まらず會社の内部でも

相應の議論があるといふ事で、兄から分けられた亡父の遺産も今は最う殆んど自分の有ではないといふ噂である。何時何處で何ういふ關係を結んだものか、清造がこのお龍といふ婦人を連れて来て、表面小間使といふ觸込みで、内實は妾のやうにしてゐたのは、去年の夏頃からで、他に下を働く下女一人を使つて、今日は歌舞伎座へ行くの、明日は花見に行くのと、この小一年間の生活は眞に放埒極つたものであつた。

其れを見かねたのか、清造の母は可愛い我子のために八方へ口を掛けて、良縁を求めた、其れを聞いた兄賢二の友人某といふのが、此に耳よりな縁邊を見付け出して呉れた。

其れは本郷東片町に貸家の二三十軒も持つて、氣樂な生活をしてゐる折田義一といふ退職官吏の次女で、お茶の水の高等女學校を卒業した令嬢であるが、何うした理由か縁が遠く、今年是最う二十七だといふのに未だ良縁がなく、當人は何か其れ相當の職業を見

付けて一生獨身生活をするといふ決心もしたといふ事であつたが、兩親は其獨身主義には全然反對で、よし晩婚ではあるにもせよ、是が非でも然るべき先を見付けて、娘の生涯を幸福に終らせたいといふ親の慈悲から、自分の財産の中から五千圓だけ娘のために分けて遣り、其れを持たして縁付けたいと云ふ、其れであつた。

清造の母は二十七にも成つて未だ初婚でゐるといふのに、若しやと首を傾けたのであつたが、段々聞けば令嬢は寧ろ内氣といふほどに柔順な生れで、其上珍らしい程双親に孝行であるといふを聞いて、この孝行の二字が強く心を動かさし、當人の清造や兄の賢二よりも自分が先づ乘氣に成つて、遂に其令嬢を清造の妻として貰ひ受ける事に談を纏め、而して昨日星ヶ岡の茶寮で新夫新婦の見合が滞りなく済んだのであつた。

二人が今話してゐたのは此事なのだ。

【四】保管

←家→

白晝のやうに明るい月を浴びて、清造とお龍が赤阪氷川町の家へ
 歸り着いた時は、最う世間は森としてゐた。
 未だ鎖りをしてゐない表の戸を排して細長い石疊の上を奥深く、
 醉ふた足ざりて音高く格子の前へ立つた時、
 「お歸りでございますよ」といふ下女のお杉の聲が聞えて、さつ
 と洋燈の光が玄關の土間に流れたかと思ふと、お杉は手早く内か
 ら格子を開けて小腰を屈めた、
 「お歸り遊ばせ、ほゝゝ大層お遅くまで……」
 「誰か來てゐるのか」と清造は不安な眼をして四邊を見廻した、
 「わ、箆筒町の御隠居様が、宵から大變お待ちかねでございまし
 たよ」

←家→

「ナニお母さんか、そいつは困つたな、龍さんお前顔を出さぬが
 可いよ、何なら最う一遍其處邊らを廻つて來たら何うだ」
 「真逆」とお龍は笑つて、
 「好いちやありませんか、何さか旨く云つて置けば」
 「むゝ其れも爾うだな」と清造は苦笑してズン／＼茶の間へ入つ
 た。
 茶の間の長火鉢にはナン／＼鐵瓶の湯が沸騰つてゐて、清造の母は
 其前に行儀よく座つてゐた、聽て六十に手のとゞきさうな老人で
 はあるが、髪も黒く皺も少く、優しいやうで何處やら底意地の悪
 さうな婦人であつた、
 「やアお母さん、何うしたんです今頃まで」と笑顔で會釋する清
 造を、彼女はシロリと上眼に見上げて、
 「お前こそ何うしたんです今頃まで、最う彼是一時だよ、私や是非
 今夜の中に相談して置きたいので、宵から來て甚麽に待つた

「や、そりや恐縮でした、兎に角此處ちや可い、僕の間へおいでなさい、彼方が可い、此處は可から杉、大急ぎで彼方へ火を點けてくれ」

と清造は母の返答もまたず、自分が先へ奥の書齋へ飛込んだ、母は不性無性に腰を上げて其後から尾いて行つた。

「實はねね」と年寄の氣急しく、

「明日は愈々結納を持たして遣るんだが、其れに就て種々相談があるんでね、鳥渡其れだけ話して直ぐ歸る積りだつたんだが、恁麼にお前の歸りが遅くなつたもんだから、今夜は泊めて貰ふ積りで待つてゐたのだよ」

「あゝ爾うでしたか、而して相談と仰しやるのは？」と、清造は敷島に火を點けて母の顔を瞻たが、母の相談といふのは流石に悪い氣持はしなかつた。

「遣る物は今朝お前のお云ひだつた通り、あれとあれと、其れで可いんだがね、彼方から持つて來る持參金の事と、其れから最一つ……」

「何です、持參金が何うしたのです？」

と清造の眉は少しく曇つた、

「今日宅へ媒介人が來て云ふには、少し最初の約束とは違つてゐるやうなので」

「ちや何ですかお母さん、先方では其持參金を廢めにしたとでもいふので？」

「いゝね爾うちやないの、其れは最う約束通りチヤンと彼の子に付けて何するといふんだがね、其れを直ぐ此方へは持つて來ないで、滿一年間は先方のお父さんが保管して置くといふの、彼の子の名義にして、相當の利子を付けて預つて置き度いつて云ふんでね」

「それは可けない、其様な、莫迦な、其様な事があるものですか」と、清造は慍り出した。

【五】猫の子

「全體あの持参金といふのは何ういふ性質のものか、先づ其れから考へたら分るでせう、あの房子さんが大した美人でもないところへ、二十七にもなつてる晩婚者だといふので、その缺點を補ふためのものぢやありませんか、成程房子さんは相應の教育もあるでせう、お母さんの鑑定通り、極めて柔順な淑徳を備へた婦人でせうが、嫵緻から謂つたら普通ですせ、其れで年齢が二十七、其様な婦人なら何處にだつて石塊のやうに轉がつてゐます、何を好んで那麽老嬢を貰ふ必用があります、莫迦々々しい、其様なのなら廢めて下さい」

清造は力任せに敷島を灰の中へ突込んで母を睨んだ。

「まあ氣の短い、能く私の云ふ事をお聴きだと分るんだよ」

「聴いてゐます、聴いてゐますけれど」

「聴いておゐでなら分らうぢやないか、詰り爾ういふ彼方のお父

さんの心ではお前方夫婦の爲を思つて、大事を取つておゐでの

だらうと思ふよ、今の處がお前方夫婦には別に纏つたお金の必

用もないが、子でも出来れば其子に就て屹と必用が出来てくる、

其時の事を思つてだらうと、私はまあ思ふんだよ」

「は、へ、頓でもない老婆心です、お母さんは人が善いから總て

を善意に解釋してらつしやるが、僕は爾うは思はない、一年間

保管するなんて、其様な失敬な事を云ふのは、僕を信用しない

のです、僕が取つたか見たかで妻の財産を浪費するだらうと思

つて、其様な吝な事を云ふのです、最初から相手が其様な水臭

い魂性では到底永久に融和して行く事は出来ないと、其様なな

「破談々々ツて、猫の子を遺取するのではなし、爾うく輕々しくは行きませんよ」と、母は少しく氣色ばんだ、

「お前は其様な事お云ひだけれど、其れはお前の邪推といふもので、私は爾うは思はないよ」

「ちやお母さんは何う思ふのです？」

「恰でお母さんに喧嘩でも仕てるやうだね、ほゝ、」と母は笑つて、

「先様で其様な事を仰しやるのは、こりや先様で此方をお試しなさるんちやあるまいかとも思ふがね」

「何故です」

「能く世間ちや持參金といふ聲に釣込まれて、心にもない婚禮をする者もあるといふから、若し其様なのだつたら、一年間其れを保管すると云つたら、何かと故障を付けて斷るだらう、此方

が爾うでなければ、此縁は無事に纏るだらう、と云つたやうな深いお考へちやなからうかとも思ふがね」

清造は何だか心の底を母から見透されたやうな氣がした。

「お前だつて何も一文なしの浪人者ぢやなし、會社ではキヤンと立派に六十圓といふ月給を貰つておゐでだらう、兄様から分けて貰つた財産もあるし高が五千や六千の端金に目の眩む人でもなからうから、其様な持參金の事や何かには餘り頓着しないで、何も斯も鷹揚に構へておゐて可いだらうよ」

云はれて見ると清造は一言もなかつた母は清造の再び言葉を返さぬのに満足して、

「たい其事をお前が含んでさへゐりや可いので、其れを鳥渡耳に入れて置きたいと思つたのと、最一つは」

母は急に振り返るやうにして、

「此處の家も嫁が來るとなると、まあ何も斯も新になるといふや

うなものだが、お前彼女は何うおしだへ」
「彼女で誰ですか？」
「おとぼけでないよ、お龍の事です」
と優しい眼で屹と睨んだ母の聲には力が入つてゐた。

【六】 九紫の女

何れは斯う来るだらうと清造は覺悟はしてゐたものゝ、眞正面から母に切出されたので、遽に胸が騒いで鳥渡返答に窮した。
「私や今夜来て杉から聞いたがお午過から彼女を伴れて何處かへお出でだつたといふぢやないかい、昨日房子さんを見合をして、今日彼様な者を引張り廻してるといふのを、若しか先方へ聞かしても善くなからうぢやないかい、全體何處へ行つておいでだつたの？」

愈々急所を突かれて清造は敗亡したが其れでも言葉を設けて、
「實は彼を處分する事に就て、雜司ヶ谷の秋山の許へ行つたので、す、お母さんには未だ詳しい事は話さなかつたですが、秋山の友人の妹でこの廣い世界に親もなく類もなく、去年秋山の友人が没なつてからは、兄を失つた彼女は本の孤獨な身の上になつて、秋山一人を兄とも親とも思つて絶り付いてゐるといふ窮状態で、什麼も可哀さうでしたから、御承知の通り去年小間使として家へ入れたので、僕が彼女の性質を見込んで、何時か彼女を妻にと貴母にも兄さんにも御相談したのでしたが、何だか素性が知れないとか、星が九紫で、女の九紫は眞人を尅するとか何とかで」
「爾うですとも、彼様なものを家へ入れて何うなるものですか」
と、母は皆まで伴の言葉を聞かずに、眼を据ゑ眉を顰めて云ひ切つた。

「それで何です、家を出すとすれば、何とか始末をして遣らねば可憐ですから、能く秋山さんも彼女とも相談したのですが……」

「何もお前が其様な事に深入りする事は要りません、秋山さんのお友達のお妹なら、秋山さんが何うにか爲さるだらうから」

「お、そりや爾うです」

「房子さんが當家へ来るといふのに、彼様な若い女が居ては可憐しなもんだから、明日にも追出してお了ひでないと大變な事になりますよ」

「お、よろしい何うにか仕ませう」と清造は不快な顔をして、

「しかし眞逆明日といふ譯にも行きませんから、まあ何とか考へて不日」

「花嫁が来る、其家には自分より先に訝しな若い女が居る、と云ふやうな事であつて見ると、来た花嫁が甚麼に悪い感情だか、其様な事は私が云はないでも、お前の方が能くお分りだらうから」

一日も早く始末を着けないちや大事に成りますよ」

「宜しい分つてます」

「成るべくは房子さんの来ない中に伺うと可いんだが……」

「何うせ出すものなら、何も其様なに急ぐ事はないです、結婚當時は房子さんだつて家の勝手が充分分らないでせうから却つて彼女が居る方が都合かも知れませんが、丁度忙しい處だから手傳はせた方が可いので、小間使や仲働きを使つてゐるのを、嫉妬の眼で見るとやうな、其様な分らない房子さんでもあるまいから、は、は、は、まあお母さん其様な事は心配しないで萬事僕に任してお置きなさい、決して悪いやうには計らひませぬから」

「何でもないと思ふ事から、能く紛擾の起るものだから、お前に如才はなからうけれど、能く考へてね」

「書棚の上の置時計がチン／＼と二つ鳴つた、

「やア最う二時だ、お母さんおやすみなさい、僕も寝ます、あゝ」

眠い「
清造はッ立つて小用を足しに廊下へ出た、若葉の中をどほして
来る夜風が冷たく身に沁んだ。

【七】 秋と春

其夜、清造は眠らうとしても容易に眠れなかつた、星ヶ岡の茶
寮で房子と見合をして歸つた昨夜は、お龍の傍にゐて其れから其
れへと話しを仕掛けたので、何事も纏つて考へる餘裕はなかつた
が、今夜は母の手前を兼ねて、お龍を遠ざけ母と床を并べて寝た
ので、種々の空想が浮んで少しも睡氣を催さなかつた。
何と取立てゝ口には謂ひ得ぬけれども謂ふに謂はれぬ歡樂に酔ふ
てゐるやうな氣がした、自分の目前には漠大な幸福が横つてるや
うな氣がして、何となく含笑まれた、其れが嗜好な、酒に酔ふた

時の氣分よりも、今少し楽しいやうに覺れた。
清造は折田の娘の房子を娶ることに就て、實際は今夜向島の堤で
お龍に話したやうな心ではないのだ、お龍に那麼云つたのは、彼
女を喜ばして置く當座の出鱈目で、其れほどまで今度の結婚を
厭ふてゐるのではなかつた、最初母から這の話のあつた時は、相
手の婦人が二十六歳の晩婚者であるといふので、何となく氣乗は
しなかつたけれども五千圓の持參金を持つてゐるといふ一事に心
が動いて、お龍に話したやうに、昨今の窮境を脱するには、其持
參金は又と得難い武器であると思つた、愛情の有無は先づ第二と
して、その得難い武器を手に入れて早速敵に當らうといふ心が起
つて、母には承諾の旨を答へて昨日星ヶ岡へ往つたのであつた。
斯うして見合をして見ると、新婦の房子は思つたよりも若やいで
見わた、お召の襲拾衣に織物の帯をしめて、島田に結ふた容姿や
縹緞が案外氣に入つた後から母が、

「清造、お前は何うお思ひだか知らないが、私は彼の子の、何となく慎ましやかに凝乎と下を向いておるでの點が甚く気に入つたよ、お茶の水の女學校出だといふから、私はモッツと灰殻な、びんしやんした活潑なお子だらうと思つてゐたが、彼様な柔順しい人だつたとは案外だつたよ、那磨いふ風なのが屹と良人を大切にされる人だと思ふよ、其れにお前年輪だつて未だ漸と二十二三にしきや見えないもの、頓だ掘出し物だよ」

と、密と囁いた言葉に別に異論はなかつた。

此時から清造の心は大牛新婦房子の方に走つてゐたのであつたが、其れでも全然お龍を房子に見換て了うといふ心は起らなかつた、お龍は何處までも捨て難い、けれども房子は欲しい、詰りはお龍を花に、房子を月に、春と秋の眺めを一時に貪りたいといふやうな氣がした、いや其れが空想ではなく、現實にその月と花とを一時に眺める機運が目前に迫つて來たので、清造は心にもなく浮々

するのであつた。

しかし、清造は持參金の一條に思ひ及んで遽に吐息を吐いた、何となく釣られたやうな氣がして腹も立つた、先方の吝な親心を散罵倒して遣りたいやうな氣もした、其れを手に入れる事が不可能であるとする、二十六の老嬢を貰ふ當初の目的と矛盾するやうにも思はれた。

「何だ詰らない、妻の財産は夫の財産だ、誰が何と云つたつて、夫の技量一つで何うにでもなる、其處は俺の技倆如何にあるのだ」

いろ／＼考へた最後に、清造は斯う斷案を下して莞爾笑つた。

戸外では風に成つたと見えて、氷川の森の騒ぐ音が手に取るやうに聞かれた。

【八】慣用手段

翌朝、昨夜那様に深更なつたにも拘はらず、氣の勝つた清造の母、親は早く床を離れた、手早く自分で寢床を疊んで顔を洗ひに臺所へ出た、

「おや御隠居様最うお目覚めでございますか」と、朝の炊事をし

てゐた下女のお杉が鄭重に挨拶するのを軽く受けて、

「昨夜はおそくなつて氣の毒だつたねね」

「何う致しまして、御隠居様こそモット御悠々お臥つてゐらつし

やればお宜しいのに」

「けれども爾うは仕てゐられないんだよ、昨夜はお前泊る積りで

来たんぢやないもの、早く歸つて遣らないと宅がねね」

恁麼對話をしながら顔を洗つた、而してお龍はと其處邊から見廻し

だが、姿は見なかつた。

下女が起きてゐるのに小間使の分際で今時分まで起きて來ぬとは

借々困つた者であるとは思つたが、何うせ遠からず追出すものだ

からと思直して、お龍の事は一言もお杉に聞かなかつた。

年齢は取つても是れが婦人のたしなみである、お杉の櫛を借り

て、白髪混りの薄い髪の毛を綺麗になでつけ、元の書齋へ歸ると

清造も昨夜の疲勞で心地好げに眠てゐた、

「清造。清造や、私は歸るよ」

二三度呼んで見たが更に通じがないので、鳥渡眉を顰めたが、身

仕度もそこくに、朝飯も食べずにセカクして簞笥町へ歸つて了

つた。

それから三時間も経つてから漸と清造は眼を覺した、眠い眼を擦

り、時計を見ると八時半だつた、

「や寢過したぞ、は、お母さんも最う歸つたんだな」と、枕頭

の敷島の袋を引寄せ、寝ながらマツヤを摺つて緩く煙を吹出して
わた。

「ほ、寝坊だこと、貴郎早くなさらないと会社が遅くつてよ」
と次の間からノコノコ入つて来たお龍を見ると、これも何うやら
今起きて来たらしい、

「は、君は何うした、矢張り今起きて来たんだらう」

「は、實は然うなの、お母さんのお歸りなすつたのも些とも知ら
なかつたことよ」と、頗る洒々たるものである、

「困つた代物だなあ、女の癖をして八時半までも寝坊をするなん
て」

「は、何うせ困つた代物よ、妾は奥様がおいで遊ばすと直ぐ追出
される人なんですからね」

「訝しな事を云ふね、む、龍さん昨夜の談聴いてゐたね、お母さ
んの云つた事を」

「聞いてゐましたことも、立聴するのは不徳だつて云ひますけれど、
自分の一身上に關る大事件ですもの、全然聴きましたわ」

「聞いたら聞いたでも可いさ、僕が追つて何ういふ事をするか、結
果を見てゐれば分るんだ」

「何でも宜ござんすわ、妾は妾で考へてる事があるから、ほ、
お龍は物凄いやうな聲で笑つた、而して兩の眸を据わて凝乎と清

造を睨んだが、直ぐ其眼を膝の上に落して態どらしく考へ込んだ。

恁麼舉動をするのは這の女の慣用手段で、山雨來らんとして風樓
に滿つ、其跡は屹と嵐が吹いたり雨が降つたりして、散々清造を

惱ますのが例なので、出勤時間に追つた清造は其れを避けるため、
無言の儘猛然と起上つて、顔を洗ふ、洋服に着換る疾風迅雷のや

うな速さで、
「大變々々、非常に遅く成つた、今日は會社で大用があるんだ」
と、牛乳を呑んだだけで、これも朝飯を食へずに出て了つた。

それを玄關まで送り出したお龍は、亂れた庇の毛を掻き上げながら、口惜しさうな顔をして何時までも立竦んでゐた。

【九】 華族の落胤

お龍は玄關に立つた儘、凝乎と門口を見詰めて身動きもしなかつた。何だか自分の前には黒い雲が立ち覆ふてゐるやうな気がして、謂ふに謂はれぬ不愉快を感じた、而して熟々自分の過去現在を考へて見た。

お龍は越後新潟在の久米井といふ農家の娘で十歳の年母に別れて繼母の手に育てられたが、所謂天の成せる麗質ごでもいふ眉目の好いのだ、女に似氣ない勝氣な男々しい性質が彼自身に災ひして、十三四の頃からお龍の名は村中に鳴響いた、勿論其れが善く鳴響いたのではない、悪く響いたのだ、お龍の父は其れを苦に疾

んでゐたが、十六の春、當人の希望に任して、お龍の父はお龍を單身東京へ出した、素より娘を東京へ遊學に出すほど、財産に餘裕のある家でもなかつたが、當人の切なる望みといひ、一つはお龍の悪い名を村から忘れられるため、二つには家庭に在つて毎日のやうに繼母と衝突する其蒼蠅さを通れるため、父は非常な大奮發をしたのであつた。

斯うして上京したお龍は、某私立女學校の生徒と成つて、多くの女學生の中に立交る身と成つた、其中にお龍は二人三人と次第に友人を拵へた、友人は悉なお龍の後進者として都の風俗に染むべき種々の指導をした、蕎麥屋や牛肉屋へも案内した、活動寫眞や寄席へも連れて往つた、演劇を見る事も教へて呉れた、男子の友人にも紹介して呉れた。

たごへ慙うした外からの誘惑がなくとも、お龍は當然自らの良心を自ら誘惑せずにはゐられぬ性質の女で、其れが都合よく外部か

ら導火を點けたのだから堪らない、火は忽ち爆然として燃上つた、
爾來二三年間のお龍の墮落放埒といふものは凄まじいものであつ

た。それでも學校だけは缺席せず通つてゐたが、本の名目に勉強して
ゐるので、學課は非常な不成績で、三年間に二度まで落第の苦い

経験を経験を嘗めたといふ事である。お龍が清造と恚感間柄に成つたのは去年の櫻咲く頃、秋山種郎と
いふ友人の家で偶然知合つたのが始めであつた、當時のお龍は墮

落の報で故里からは疾くの昔に學資を斷たれ、其人のやうにして
同棲してゐた、秋山の友人某といふ早稲田大學生には死別れ、其
日々々の糊口にさへ困つて、秋山の袖に縫つて詫しい月日を消し
てゐた時であつたので、清造が當座の好奇心から鳥渡誘ふ言葉
を、お龍は渡りに船と喜んで遂に今日あるに至つたのである。
けれどもお龍は、自分の虚榮心を満足さすため、越後新潟の農

家の娘といふことは、死んだ秋山の友人は勿論、秋山にも清造にも
飽くまで秘してゐた、自分には京都の某公家華族の落胤で、仔細あ
つて母は妾を五歳の時故郷の越後へ連れて往つたが、十歳の時死
て、天にも地にも便る方から育てられた其れさへ今は世を隔
りして父子の名乗りをすべき確乎な證據を持つてゐる也、自分
が相應な身分に成つた上、機會さへあれば京都へ行つて父の公家
華族と父子の對面を遂げる意志であると吹立てゝゐるのであつた。

【十】 三味線の胴

華族の落胤であるなど、吹立て、他を煙に巻いて心の裡で笑つて
ゐるといふ横着極る男のやうな氣象のお龍にも矢張り女は女で、
自己の將來を案じるといふ弱い點はあつた、昨夜自分を追出して

了へといふ清造の母の言葉を立聴いてから、自分の運命が非常な
 危急に迫つてゐるやうな気がして、一種の寂しさと悲しさを覺
 けた、けれども今朝は清造が其れに對して、昨日のやうに慰めて
 くれるだらうと期待してゐた甲斐もなく、清造が其事に就ては多
 く語らず、慌てたやうに出て去つて了つたので、一夜の中に清造
 の心までも動いたのではなからうかと、嫉妬と疑念と憤恨が一時
 に頭腦を搔廻し、臺所にお杉がゐなかつたら聲を立て泣いて見
 たいとまで思つた。
 表面小間使といふ名義で此家へ引取られてからは、お龍は忽ち生
 活の苦痛から脱して、不規律不節調なこの家庭でさんぐ費澤を
 して来たのであつた、名は小間使でも實は妻君以上の權威を揮つ
 て来たのであつた、聽ては名實完き妻君の位置に直らうといふ野
 心さへ充分持つてゐたのであつた、謂はゞ朋輩のお杉をさへ、自
 分の召使同様に追使つて来たのであつた、其れが榮枯忽ち地を換

へて明日からは日蔭者同様な可憐な境遇になるのである、自分の
 權威を奪つた當の敵を表面だけでも奥様と呼ばねばならぬのだ、
 其れが元來負ける事の嫌ひな自分に何うして堪へられやう、假令
 先から追出されぬまでも、其れに堪へられねば我から身を退いて
 此家を出ねばならぬのだ、此家を出た後の自分は甚麼なるであら
 う、又もや去年の苦痛、其日の食事には事缺いて、墮落の上の
 墮落を重ねればならぬのである、思へば口惜しい、惜げない、實
 に残念だ？
 お龍は何時まで経つても石地蔵のやうに玄關先に立つた儘、我知
 らず袖口を噛んでホロ／＼と涙を零した。
 「お龍さん、早く食らないと御汁が冷めますよ」と、お杉が臺所
 から呼立てた、
 お龍はハツと思つて手早く眼を拭いたが、
 「妾今朝食べないから……」と、無意識に云つて了つた。

其時、黒緞の羽織にセルの單衣を着て古びた白縮緬の兵兒帶をしめて、新らしい麥藁帽を被つた二十七八の男が、太い洋杖を片手に、三味線の胴のやうな眞角な黒い顔に笑顔を浮かべながら、ノック門から入つて来た、

「おう秋山さんが」とお龍は思つて未だ此方から聲を掛けぬ先、秋山種郎は大きな聲で近づいた、

「は、は、は、何うしました龍さん、僕は今其處で堀川君に逢つたが、何だか、貴女が甚く心配してるから、早く行つて慰さめて来て呉れといふのでやつて来たです、は、は、は、何うしたんだね全體」

「おや爾う、妾今日お宅へ伺はうかと思つてた處ですわ、さあ何うぞ」

お龍は先に立つて奥へ案内した、秋山は其後から無遠慮に主人清造の書齋へ通り、帽子を脱いでヒラリと投出した、

「何か事件が起つたのかね、は、は、は、犬も喰はないといふ一件なら、仲裁役は平に御免を蒙るよ」
「いね其様な氣樂な事ぢやないんです大事件なの、妾、是非貴方に聞いて戴きたいのですわ」
「む、は、は、聞かう、大に聞かう」

【十一】 軽い調子

恰で自分が此家の主人でもあるやうに、清造の机の前へ傲然と胡坐を掻いて、十坪に足らぬ庭の新緑を眺めながら、出された茶をガブ、く、喫み、無遠慮に菓子を手らげ、その相問々々に紙巻を無性に燻かし、濛々と立昇る煙の中から眞角な大面を出して、お龍が泣くが如く訴ふるが如き線言を小半時間も聴いてゐたが、聴いて三味線の胴に似た盤大面はカクリと一つ頷いた、



秋山種郎は平然としたもので、漸と栗饅頭を嚙下んで、
 「僕は君を亡友丸尾の遺愛の人として堀川と斯ういふ關係になる
 事は餘り好まなかつたが、彼の時の龍さんの境遇が彼の通りだ
 ったし、堀川が又非常に熱望してゐたから、敢て反対はしな
 かつた、けれど慥に成らねば可いといふ懸念は其時から
 あつた」
 丸尾の事を云出されるとお龍は一言もなかつた、お龍のやうな女
 でも秋山の前に甚く面白くないやうな気がした、
 「そりや妾が悪かつたのです、丸尾さんに對して一生貞操を守ら
 なきやならないのを、つい魔がさして慥に成らねば可いといふ懸念は其時から
 「最う可い、最う其事は云ひッこなし己に過去つた事は詮方がな
 いとして其處で君のために計るに」
 「其れなの、秋山さん後生一生だから好い智識を貸して頂戴」と、
 お龍は形ばかりでなく心から秋山を拜んだ、

【十二】 麥 饅 頭

この秋山種郎といふ男は毒にも薬にもならぬ、唯見たまゝの洒落
 な無頓着な男で、何方かと云へば形式だけが東洋的豪傑風に似て
 ゐた、清造と同じ高等商業出身であるが、少々頭腦が鈍い上に、
 世間的交際が眞に拙いので、卒業早々住込んだ某會社さへ間もな
 く失敗し、其れから後は兎角不遇で、今は雜司ヶ谷の奥へ隠遁
 んで、翻譯物を雜誌社や書肆に賣つて、若い書生一人を相手に辛
 くも獨身生活をしてゐるので不思議にも慥に成らねば可いといふ懸念は其格
 に於ては全く正反對である才子肌の清造や、神經質で陰鬱であつ
 た丸尾などと気が合ひ、長い間双方から親友の交りを通じて來た
 のであつた。
 慥に成らねば可いといふ懸念は其格
 慥に成らねば可いといふ懸念は其格
 慥に成らねば可いといふ懸念は其格

さんが堀川に今まで以上の快感を興へれば其れで可いんだ今度
来る妻君と君とを比較して見て、妻君よりも龍さんの方が堀川
に愉快であれば其れで可い、龍さんは直に勝利者たる事を得る
のだね、はゝゝ、腕次第さ」

お龍は一理ありと思つた、けれども尚ほ押して

「しかし堀川さんの心が新しい方に向いたら？」

「其處が龍さんの技倆ぢやないか、成程人は新奇を好む動物さ、
だから或ひは堀川の心が他日何う變ずるかは知らないが今の處
では決して龍さんを何う斯うせうといふ考へはないらしい、先
刻も非常に心配してゐて、態々僕に慰めて呉れと云つた位だか
ら、大丈夫だ、大に新妻君と競争するさ、而して龍さんの腕

で追ッ出して下さ、はゝはゝはゝ」
秋山は大口開いて笑つた。
「全くだわね」と、お龍は凝乎と考へ込んだ、而して心の裡で

欠

欠

清造が別に咎めもせぬのが、房子には妻たる自分の權威を傷つけられたやうに思はれた、

「まあお龍ッて何といふ女だらう妾の前で旦那様にツケく冗談なんか云つたり、失禮な、其様な召使が何處にあるものか」

思つて、房子は心から腹が立つた事もあつた、
「慙女があるといふ事が最初から分つてゐたら、此處へ來るのではなかつたのに」

「しかし那樣なお優しい旦那様が、眞逆らしい妻を踏付けるやうな、其様な不謹慎な行爲をなさう筈もなく、全く此の女が墮落した女學生氣質の、禮儀も作法も何も辨まへてゐないのだらう」

と思ひ直して僅に心を慰めてゐたのであつたが、房子はこのお龍といふものが、口喧ましい姑よりも、鬼千匹といふ小

男よりも更に厭はしいものだと思つてゐた。

お龍は又甚麼深謀遠慮を胸に疊んでゐたか、表面には房子を主人

として敬ふやうに見せ掛けてゐて、其の實始終冷笑の眼で房子を見てゐた。その不謹慎な舉動がチラ／＼房子にも見えて、其都度不快の種となるのであつたが其れを又傍から見ても下働女のお杉は、優しい慎しやかな奥様の房子に同情して、限りなくお龍を憎んだ。

斯うして一家思ひ／＼の暗闇を、半月ばかりも續けた後の或日であつた、梅雨空の朝から曇つて、空気の重い、風の無い、呼吸さへ切迫りさうな午後二時頃、房子は一人で所天清造の居間へ閉籠つて、何をするとはいふでもなく、硝子障子越に狭い青葉の庭を眺めて、熟々考へ込んでゐた。

「御免遊ばせ」

嫌に狗鼠鄭寧な沈着拂つた聲で、次の間からスーと襖を開けたのはお龍であつた。

お龍は末座から兩手を支へて、額越しに尻と房子を見上げて、

「あのう奥様、少々お願ひがございますので……」と、此方の氣色を窺つた。

房子は氣軽く向直つて笑顔でお龍を見た、見ればお龍は美しく化粧をして、小間使らしくもない華美な外出の着物を着てゐた。

「奥様、甚だ申兼ねましたことですが私し、お暇が戴きたうございますので？」

「さあ？」

房子は餘りに突然なので、思はず喫驚の眼を睜つて屹とお龍を瞻た。

【十八】 今夜の夜汽車

お龍は嘲るやううに房子を見返し、言葉だけは何處までも鄭寧に、突然恚慥こと申上げましては、眞に我儘勝手なやうで恐れ入り

「さすが、是非お暇が頂戴致したうございますので」と、是非
 いふ二字に強く力を入れた。
 「本統に突然だね」と、房子は微な長太息を吐いて、
 「そりや暇を呉れなら何時でも進げないことはないが、何だか訝
 しいぢやないか、ほゞゞゞ、何うかお仕かへ」
 「いね、別に何う致したといふ事もございせんが、私しも長々
 御當家様の御厄介になりましたが、都合上急に故郷へ歸らうと
 存じまして、はア」
 「故郷へ歸る、都合で故郷へ歸るとお云ひのを、此方で強て止め
 るといふ事は出来ないけれど、旦那様が何と仰しやるか一應旦那
 様に伺つた上でなけりや、妾から今直ぐ可いとも不可とも返
 辭は出来ないから」
 「いね、旦那様には最うお許しを受けましたので」と、お龍は房
 子の言葉を遮つた、

「おや、旦那様が何時其様な事を仰しやつたい、妾は初耳だが、
 お前にお暇をお出しなさる思召しなら、妾に先づ何とかがお話し
 がありさうなものだが、本統に妾は未だ何も聞かないのだよ」
 「では旦那様がお忘れ遊ばしたのでせう、私しは昨夜旦那様に爾
 う申し上げまして、お許しを受けました上、今朝も御出勤前に私
 してから御挨拶を申し上げますら、随分機嫌好く行けつて仰しや
 いますして、はア」
 「訝しいね、其れなら其れと仰しやらなければならぬのに、
 何だか變だね、お前其様な事云つて逃出すんぢやないかい、
 ほゞゞゞ」
 「いね何う致しまして、逃出すなんて全く其様な事はございませ
 ん、はア、事實確乎でございます」
 「爾うかい、妾は何だか腑に落ちないが、其れなら先ア其れとし
 て、何時歸るのだい？」と、房子は改めてお龍を見た、房々々長

い光澤のある髪をデユくの庇に結ふて、金光の三枚櫛も可いが、顔には眞白に化粧をして、襟と帯と着てゐる衣服の色との配合に何處までも注意を凝らした、おそろしいハイカラ姿が房子に不快を與へた。

お龍は酒々として、

「今夜の夜汽車で参らうと思ひますから、何うか只今から、はア

「今から？」と房子の聲は少しく顫へた。お龍が平素から自分を自

分も思はぬのは充分承知してゐた、けれども所天の不在に慥

事を云出して自分を困らせやうとは思はなかつた、假りに一家を

預る主婦として、召使一人に暇を出すに誰に遠慮會釋の必用もな

いやうではあるが、このお龍に對してだけは、房子は其れが自分

の思ふ儘にはならぬやうに感じた、謂ふが儘に此儘暇を出した上

若し所天が其れを知らなかつたのであつたら何うであらう、所天

の氣に入りの召使を、態と所天の留守を狙つて追出した事になる、

或る賤しい心で強て所天の眼を窺んで追出した事になる、幸ひに其れを所天が咎め立てられぬまでも、誤つた眼で自分の心の底を見られるのが辛い。

房子は少時黙つて考へてゐた、其れをお龍はもどかしがつて、

「本統に奥様大丈夫なんですよ、昨夜も今朝も爾う申上げてお許

しに成つたのですから、旦那様に申上げませぬ先に奥様に爾う

申さなかつたのは私しの抜きでございませぬが、嘘は決して申

上げません、全くなんですから、はア、奥様に御迷惑の蒐るや

うな事はありません、ほゝほゝ」と華美に笑つて、

「此通り仕度まで致しましたのですから、何うか、是非、餘り我

儘ですけれど」と、何處までも他を踏付けてゐる。

【十九】 忠義立

何程止めても止まらず、お龍は已に主人の許しを得たのであると云張り、眼中更に主婦の房子なく、お杉を頼んで腕車を命じ、大形の支那靴と柳行李を載せて、憎い程巧妙な別離の辭禮を残して、重い空氣の中を軽い護謨輪を飛ばして、何處ともなく去つて了まつた。

この唐突な出来事に房子は非常に胸を痛めた、果して所天が昨夜其れをお龍に許したのであらうか、其様な事なら一言位は自分に話しかなければならぬ筈であると思ふた、若しや此事がお龍が自分分を救いたので、所天の知らぬ出来事であつたなら、何と所天に辯解すれば可いのであらうと思ひ惱んだ。房子も敵であるご其れ房子のためには正にお龍は當の敵である。

とはなしに自覺してゐた、その敵が先方から旗を捲いて逃げたのであれば、房子は當然喜ばねばならぬのである、其れを喜ばずに斯うも思ひ煩ふとは、何といふ優しい心であらう、實に優しい心である、房子は、この堀川家へ嫁付いて來てから、萬づに自己といふものを無にして、所天清造を本位に家事を整理してゐるのであつた。

下働女のお杉はお龍を送り出してから慌てたやうにバタ／＼奥へ駈込んで來た、一見世帯顔しと見ゆる、三十二三の、眼のまん丸の唇の厚い正直さうな顔にほた／＼と笑を湛へて、

「おほい、トウ／＼去つて了りましたよ奥様、これで厄拂ひでございますよ」

「だつてお前、旦那様のお留守中に……」と房子は依然として眉宇を曇らしてゐた、お留守だつて何だつて、此處のお家は何かから

何まで奥様が御采配をお振り遊ばすので、彼様な奴一人位お留守にお出し遊ばしたつて、誰が何と申しますものですか、それに筆筒町の御隠居様も彼奴がお嫌ひでございましてね」

「爾うかい」と、房子は氣のない返辭をして、物思はしさうな顔を
「旦那様がお歸り遊ばして何と仰しやるか、彼の人は昨夜お許しを得たといふけれど、其れが本統だか何うだか……」

「おや爾う申しましたか、昨夜旦那様のお許しを得ましたつて」

「爾う云へば其様な事があつたかも知れませんか」

「何故？」
「奥様御油斷遊ばしちや可けませんよ、是れには何か魂膽があるかも知れませんかよ」

「ほゝ、其様なことがあるものかね」

「いゝに、爾うちやございせん、屹と何かございますよ、慥に事申しちや何ですが、奥様はお正直でゐらつしやるから、何も御存じないやうですけれど、私し今だから申しますが、お龍さんには貴方、お小間使ちやございせんのですよ、實は旦那様のユロなので」とお杉は小指を出して見せた。

房子は其れを見ると嫌な氣がして、主婦たる自分の權威の半ばを削がれたと同時に、大切な所天に激しい侮辱を加へられたやうに感じた。

「ですから私しや毎日ハラハラして氣が氣ぢやなかつたのですよ、奥様のやうな善い御方がお興入遊ばしたのに、未だ彼様な奴が酒々してゐるんですもの、旦那様も旦那様だと思つて、私しや口惜しくつて」

「お杉は我事のやうに躍起となつたが急に聲を潜めて、

「しかしね、奥様、今彼奴が出て了つたのは何よりの厄拂ひです

が、私しの邪推では、昨夜旦那様と何か約束があつたかも知れませんが、私しは、爾うでなきや、慙う易々彼奴が出て行く筈がございませぬもの、奥様決して御油断なすつちや可けませんよ」とお杉は悪意で煽動するのではなく、心から房子に忠義立てをして斯う注意した。

それを房子は軽く外して、

「ほ、それはお前の邪推だらうよ、旦那様に限つて其様な後ろ暗い事を遊ばす筈がないから、邪推だらうよ、ほ、ほ」と打消した。

【二十】 十坪の庭

自分の權威を落すまい、所天の人格を墮すまいといふ遠慮から、房子はお杉の言葉を打消して了つて、表面には何處までも冷靜を

装つてはゐたが、心の裡には荒い涙が打つてゐた。お杉が臺所へ退いてから、房子は胸が迫つて何とも謂へぬ悲哀を覺えた、涙は出ぬが泣くよりも辛いやうな氣がした、双の臉が重いやうに感じられて、密に指で押したら大なる露がほろ／＼と零れ

はしまいかと思はれた。灰色の雲は一面に空を覆ふて、今にも降出しさうに成つてゐながら、何時まで経つても少しも降り出さぬ、壺を被つたやうな今日の天氣が、何となく今の自分の心と同じやうに感じられた。房子は堪らず起つて庭へ下りた、僅か十坪に足らぬ狭い庭、それでも強い青葉の薫りのする庭を、夢のやうに彼方此方と歩きながら、考へることもなく自分の上を考へた。

自分はこの二十七まで何一つとして不足のない家庭に育つた、父は昔氣質の幾分か漢學癖に傾いた頑固な方であつたが、自分には非常に慈愛深かつた、母は中々確乎した氣象の婦人で、今滿洲へ

赴任してゐる兄を、大學を出るまで少しの墮落もさせなかつたのは、悉な母の力であつた、斯ういふ家庭に育つた自分は、物心づいてから今日が今まで、少しの浮いた心も起らなかつた、それは學校時代には、華美な外交官の令夫人を夢想した事もあつた、海軍士官を良人に持たうといふ心を起した事もあつた。徒らに男子の壓迫を受けるが婦人の能ではない、一生獨身生活を守つて婦人の天與の本能を發揮しやうかと思つた事もあつた、けれども其様な心は學校を出てから漸次に薄らいだ、最初の理想にも似ず見事獨身生活に失敗した人も見た、華やかな生活、費澤な日常を夢みて、思ひも寄らぬ境遇に成つて、理想と現實の逆も一致せぬを啣ちながら、其日々々々を煩悶に暮してゐる多くのお友達も見たので、自分是最う決して其様な心を起すまいと思つた、縁あつて人の妻と成るなら、世の中を正道に渡つて行く人で、愛情の深い親切な人でさへあつたら、財産や地位に拘はらず自分の一生を任して可い

と思つた、二十七といふ年齢になるまで相當な縁のなかつたは、虚榮に憧れたり、無暗と男選みをした譯ではなかつた、何ういふものか運悪く双方の意の合ふ縁がなかつたのである、斯うしてこの年齢に成つてから始めて此家へ来る事に成つたのであるが、來て見れば聞いたのは大違ひで、所天の人格にも疑はしい點がないでもない、殊にお龍といふやうな彼様な女も居た、自分は欺かされたのではなからうかと思つたが、嗚呼最う遅かつた、自分は堀川清造の妻として所天に身を委ねた後であつた、たさひ所天の人格が甚麼であらうとも、所天の品行が甚麼であらうとも、人の妻として操を破つて、此儘實家へ歸るといふ勇氣は自分には出ない、慙慙因循な自分の心を笑つて或るお友達は、「房子さんは現代的の頭腦ぢやないのね、確乎に半世紀は後れが自分には何うしても爾ういふ浮いた気分にはなれなかつた。」と揶揄した事もあつた、後れてるか進んでるかは知らぬ

房子は恧麼ことを考へてゐた、而してお杉が云つたお龍が所天の
 妾であつたといふ事が、何うか嘘偽であつて欲しいと願つたり、
 今夜所天が歸つて來たら、お龍が出て去つた事を何ういふ風に話
 したら可からうなごも考へてゐた、所天の感情を損はず、自分も又
 厭な事を聞かす、この問題をさら／＼と水に流して了う法はある
 まいかと考へた、恧う考へてゐる中にも、お杉が「奥様御油斷遊
 ばすなよ、これには何か深い魂丹があるのですよ」と云つた言葉
 を思ひ出して、自分で自分を怯へるやうにして、強て其言葉を打
 消さうとした、否心の底から取除けやうと勉めた。
 房子は恧うして三十分間餘りも庭を歩いて見たが、纏つた考へは
 つかなかつた。

【二十一】 大 策 略

「奥様御油斷遊ばしちや可けません、是れには何か魂丹があるか
 も知れませんよ」と云つたお杉の言葉は全く邪推でも煽動でも
 なかつた、明かに圖星を指してゐた、魂丹も魂丹、お龍が突然暇
 を取つたのは容易ならぬ大策略があつたのだ。

堀川家を出たお龍の腕車は、眞一文字に駈出して溜池から御堀端
 へ出た、外堀線の電車通りを虎門へ走つて、丸の内を過ぎ京橋三
 十軒堀を横切り、築地から綱殻町へ出て濱町三丁目の通りへ來た、

「若い衆さん、其處の横丁を曲つて頂戴」

お龍は車上から叫んだ、車夫は心得て細い横丁を曲つて半丁計り
 も走つたかと思ふと、お龍は又、

「鳥渡々々、其處の格子戸の家よ」と指圖して俵を停めさせた。

明るく陽気に、什麼も居心地の好い住居である。清造はシロく四邊を見廻しながら笑顔で、

「何うだ氣に入つたらう、これなら先づ當分不平なしに住へるだらう、什麼不平家の龍さんだつて、はゝゝ」

「不平家は酷だわ、だつて貴方那麼して毎日奥様のお顔色を窺つて暮らしてゐた日にや何ぼう妾だつて氣がくさくしてしま

すもの」

「いや御尤も、だから恚うして君を此處へ迎へたんだらう、此上の議論はありますまい、如何です龍さん」

「はゝゝ莫迦にしてゝよ貴方は、しかし氣に入つたわ此家は」

「ぢゝ氣に入れば何よりだ、こゝろで何うだつた出て来る時は房子が何か云つたらう？」

「はゝゝ其れが大變なの」お龍は片手を差伸し、清造の前の巻

貫入を取つて、富士を一本摘み出して火を點けた。

【二十二】 現代語

お龍は清造の前をも憚からず、無遠慮に富士の煙を燻かしながら先刻家を出て来る時の容子を話した、清造はその無作法千萬な不行儀を咎めやうともせず、満足さうに笑顔で聞いてゐた。

「妾一時は困つて了つたんですが、無茶苦茶から胡魔化して出て来て了つたの、全く骨が折れたことよ、はゝゝ」

「はゝゝをいつは面白かつた、龍さんの困つてる姿が目に見ゆるやうだ、はゝゝはゝゝ、其れぢや何だね、龍さんを此家へ斯うして

住はせるために、此の間から二人で秘密に計畫してた事は些さ

も知らない容子だね」

「は、其様な事には少しもお氣がつかれないんですが旦那様のお留守中に歸つて貰つちや、妾が旦那様に申譯けがないッてね、

それは、大變なの」
「ふむ、昨夜にも鳥渡僕から話しよければ可かつたんだが、僕も何だか氣が咎められたもんだから、つい言出さずに了つたのさ、は、ま、まあ可い其れも滞りなく済んで了つたんだから、跡は僕の辯口で旨く胡魔化して置けば可いんだ」

「しかし何だか濟まなはやうな氣も仕ますことねわ」
「何が？」と、清造は含笑んだ。

「奥様にですわ、那麼正直な方を救いて、恁麼ことしてるかと思ふと氣が咎めて」

「餘り氣の咎めるやうな御人體でもあるまい、鐵面皮の方にかけてちや遙に僕以上だからねわ」

「まあ、随分だわ」と、お龍は片手を上げて清造を打つ眞似をし

たが、直ぐ其手を引込めてほろりと投首に成り、
「しかし姜熟々考へると、人生てふものは墓ないものだと思います

わ」と、急に眞面目に成つた、お龍は時々恁麼半可通な人生だの生活だのといふ現代語を使つて得意がるのが癖であつた。

「今は信うして貴方と華やかな生活をしてゐるやうですけれど、今までと違つて貴方には那樣な奥様も出來たのだし、何時貴方から捨てられて了うか分らないと思ふと、何だか云ふに云はれない悲痛を覺えますわ」

「はッはッはッ、始まつたね、又龍さんの例の十八番が、爾う云つてるかと思ふと直ぐ浮き立つて騒ぎ出すのが癖だからねわ、果して人生てな問題を頭腦に置いてるのか何うだか、兎に角怪しいものさ」

「其様なに輕蔑したもんぢやないわ」
「輕蔑はしないさ、だけれども事實が爾うだから、は、ま、其様な莫迦な考へを起す手間で、何か美味い物を食べる工風を仕やうぢやないか、今日は移轉祝だ、大に著らうぢやないか」と、

清造は取合はなかつた、すると、お龍の態度は忽ち一變して、又元の活々とした浮いた調子の元氣に戻つて、

「大賛成？、ほ、ほ、ほ、しかし妾下町の勝手は不案内ですが、此邊に好い料理屋があつて？」

「うふ、其様な事を云ふと田舎女だと云はれるよ、此處は東京の真中だ、而も粹な濱町です、お望みとあらば甚麼食物でもあります」

「ほ、ほ、ほ」

其時、表でカラ、と格子を開ける音がした、

「は、は、は、こいつはお詔へ向だ、素的に粹な家ぢやないか、この中にデコ、くの束髪で龍さんが居るかと思ふと、何だか不調和の感がある」

無遠慮に大な聲で喚きながら、案内もなくノコ、ノコ上つて來たのは、雜司ヶ谷の豪傑秋山種郎であつた。

「おう秋山、能く分つたねわ」

「何です秋山さん失敬な、デコ、くの束髪だなんて」

二人は笑顔で秋山を迎へた。

【二十三】 金の相談

空一面にはびこつてゐた密雲の一角が破れると、夕暮前から小糠のやうな雨が降出して、什麼も梅雨季らしい蕭やかな夜になつた、奥の八疊の真中へ大形な食卓を据ゑて、その周囲を取巻いた清造とお龍、客の秋山種郎の主客三人は酒を飲みながら面白さうな高聲で話してゐた、幾度となく勝手の格子戸が開いて、岡持を提げた仕出屋の若衆が出入りした、

三人の談話は何の事はないお龍の身に關した事ばかりであつた、其中に房子の噂や批評も出た、秋山は例の三味線の胴に似た四角

な盤臺面に笑を溢らして、四邊憚らぬ高調子でお龍に柳拵った、其都度お龍は笑つたり慍つたりした、而して三人はだんく顔が熱つて酔が昂つて来た、猫の額のやうな狭い庭では、金剛簀の葉に雨の音が頻りであつた。

「しかしマア是れで龍さん萬歳だ、恁麼濱町てな粹な所に、其様な束髪姿は聊か不調和の感じもないではないが、まあ可い、ははは」秋山は矢張り何だか要領を得ない事を云つてゐる。

「そりや結構ですわ、恁うして戴いたら、しかしお宅には那麼して房子さんと仰しやる御立派な奥様がチャンと控へてお出でなさるんだから、妾のやうな者は何日甚麼悲しい目に遭ふか分らないと思つて、今から其れだけが不安ですの」と、お龍も依然として同じやうな事を繰返してゐた。

「蒼蠅いねね、未だ那様な事云つてる、僕に爾ういふ浮薄な考へ

があるなら始めから恁麼にして龍さんを此家へ何しは仕ない、ねね秋山、爾うちやないか、其様な事を云ふと何だか、兎に角斯うするだけでも今の僕の懐中では容易ぢやない、未だ恁麼に何も揃つちや居ないが、是れでも二百圓は羽が生へて飛んで了つた」と清造は賤しい金の勘定まで始めた。

「はッはッはッ、二百圓が三百圓要つても詮方がない、なア龍さん、ははは、爾うちやないか、其様な金の事なんか云はないが可い、金は天下の融通物だ、人間働きさへあれば金なんか何うでもなる、だから吾輩なんか眼中更に金の問題なしだ、有ればトシく使つて了う、無ければ三日でも食はずに居る、ははは」

「妾も爾うよ、お金なんか眼中に無いの、お金の事を云ふと其人の人格が下るわ」
「生意氣な事を云ひ給ふな、君達ア口でこそ其様な事云つてるが、事實は大に口に反してゐるんだ、だから僕ア金力萬能論者で、金

ほど貴いものはないと思つてるんだ、ところで」と清造は遽に眞面目腐つて座り直し、「その金の事に就て秋山君に相談があるんだが」

「吾輩に金の相談、は、比丘尼に髪を結へといふやうなものだ」
「莫迦？、誰が君なんか金に金を貸つて奴があるもんか」と清造は笑つた、お龍も笑つた。

秋山豪傑少々レ氣味となつて、頭を掻くき訊ねた、

「は、ちや何ういふ相談だ？」

「む、他ぢやないが、宅の房子、彼女の事に就てだが、房子は全體五千圓といふ持參金を持つてるんだ」

「む、其事なら聞いてゐた」

「ところが其持參金は彼女の親父が保管してゐて、僕等が自由に使用する事を許さないのだ、好いかね、餘り人を莫迦にした談ぢやないか、僕を無能力者と心得てるんだ」

「は、は、は」

「餘り忌々しいから、計略を以て難なく此方へ卷上げて了ひたいと思ふのだ、その相談だ」

【二十四】 美 點

成程と思つて秋山は盤大面にニヤリと笑を零した、

「は、は、君の相談なら大抵其様な事ぢやらう、勿論、什麼なる論理から推定しても、妻君の持參金なら夫たる君にも其れを使ふ権利はあるんだが、妻君の親父が頑固で其れを保管してることいふなら、何うも手の付けやうはないね」

「ところが有るんだ、まあ能く聞いてくれ秋山、僕ア別に彼の房子を愛して貰つたんぢやないよ、筆筒町の母が喧ましく勤めるのと、その持參金だ、そいつを一時融通して息を吐かうと思つ

たので、愛はないが那樣な事にしたんだ」と、清造は慙う云つてナヲリとお龍の顔を見た、お龍は冷笑のやうな笑を唇頭に浮べてゐた、

「愛がないなんて、君の新婚旅行は随分睦まじいもんだつたといふ事だせ」と、秋山は半ばお龍を揶揄ふつもりで口を挟んだ。それが清造の胸へギツクリ来て、渠は鳥渡狼狽へた、實際渠は房子を愛してゐるのではない、お龍と較べて愛には少しも甲乙はなかつた、唯妻といふものや婦人といふものに對する考へが、放蕩な渠の性情として、極めて不眞面であるばかりで、何れを花とも月とも差別はなかつた、出來得る限り二人を自己の快樂の道具に供しやうと思つてゐるのだ、だから斯う云はれると、側に居るお龍に對して少々良心が咎めたのであつた。

「そ、其様な事はないさ、まあ聞き給へ、其處で僕は斯う云ふ新案を考へたんだ、全體あの房子といふ婦人は極く舊式に出來て

ゐて、少々自己の意志には反しても、所天の命令なら曲げて服従するといふ點がある」

「美點だねわ」と秋山は頷いた、

「ほ、本統に美點ですわね、妾なんぞ逆も及びませんことよとお龍はツンとした。

「おツと失敗つた、龍さんの事を云つたんぢやない、はッはッはッ」と秋山は大な身體を揺つて見せて、

「其れで何うするんだ？」

「うむ、その服従心を利用して、旨く房子を欺き、房子から親父を説伏させて、難なく此方へその五千圓を持つて來させるといふ策略だ」

「妙々、何うしても君は色惡に出來てるぞ」

「失敬な、妻の有を夫が使ふのが色惡なもんか、まあ其様な議論は別として、その策略を行ふには此に二三人の役者が要るんだ

← 家 ←

宜いかね、會社の同僚や部下に相談しても可いが、其れでは内情が世間へ暴露して拙いから、この役は一つ君を勞しやうと思ふんだ、何うだ君、一奮發して呉れないか」

「うむ、吾輩で役に立つ事なら行つても可いが、まあ何ういふ事を爲るんだ」

「何でもない事だ、幸ひ君は未だ房子を知らないから、君が頑固な因業な高利貸なんかに成つて、僕に手酷く債權の請求をして呉れれば可いんだ、すると僕が其れを利用して房子を説付けるんだ、何うだい」

「高利貸に成るのか、酷いね」

「ほ、ほ、ほ、お龍は笑つた。何も本統の高利貸に成るんぢやない鳥渡其場だけ演劇的に演つて呉れりや可いんだ、其換り成効報酬を出す、首尾よく房子が親父の方から其れを持つて來たら、君に二百圓禮する、二百圓

の日常なら安くはないせ」
秋山は冗談半分で聽いてゐたが、清造の方は至極眞面目であつた。

【二十五】 短い夜

← 家 ←

宵から降出した淋しい雨の夜を、房子は十二時一時と何時まで経つても歸宅せぬ所天を待つてゐた、新婚旅行の時京都の飯田呉服店で買つて貰つた新案の浴衣地を擴げて、電燈の下で頻りに針の手を動かしてゐた、今にも所天が歸られたならといふ優しい妻の志は、沸騰つ鐵瓶の湯氣や、新しい布巾を掛けた脚高膳に見えてゐた。

更けるに従つて雨の音は烈しくなるやうに覺れた、遙か表通を通る傳の音のする度、房子は針の手を止めて耳を澄ましたが、車輪の響は漸次に遠ざかつて消えて了つた、お杉を先へ寢さしてから

最う彼は三時間餘は経つたと思はれた、其時から縫出した浴衣は、
 巳に半分以上出来上つてゐた、天地は地の底へ減り込むやうに鎮
 つて、軒先や庭の木を拂ふ雨の音が、悪魔の囁きのやうに聞けた、
 時計を見れば三時前であつた。
 房子がこの堀川家へ来てから、清造が家を明けたのは今夜が始め
 て、あつた今日突然お龍が暇を取つて出て去つたのと、所天の歸
 宅の斯う遅くなるのが、密接な關係を持つてゐるとは清い心の
 房子には氣が付かなかた、急に會社の方で用事が出来たのかとも
 思つた、其れども若しや所天の身に何か變事でもあつたのではな
 からうかといふ優しい取越苦勞もした。
 お龍の事に思ひ及ぶと、云ふに云はれぬ不快の思ひが胸に満ちた
 が、其れがために所天を疑ふたり怨んだりする心は露ほごも起ら
 なかつた、お杉の云ふ處が眞實であつたとすれば、其れは所天が
 獨身の寂寥さ不自由さに、一時爾ういふ事にしたのであらうと、御

油斷遊ばすなと云つたお杉の言葉を、心の底から取除けやうとし
 た。
 房子は清造の軽い浮いた調子や、男らしい威嚴の缺けた點やらが、
 何となく自分の理想と合はぬやうな感じもしたが、一旦縁あつて
 此家へ来た以上は、たとひ所天の人格に少々缺けた點はあつても、
 其れを賤しめたり輕んじたりしてはならぬと思つた、所天の缺け
 たる點を補つて行くのが妻たる者の責務で、出来得る限りは妻の
 善い感化を所天に及ぼし、漸次に所天を善い方に導いて行かねば
 ならぬのであると、恁麼美しい健氣な事を考へた、而して筆筒町
 の所天の兄賢二が、所天に較べて教育はないが、好人物である事
 やら姑のお兼が中々男優りの確乎してゐる婦人である事や、下女
 のお杉が連添ふ男に置き去られて散々苦勞を嘗めて来た丈に、いろ
 はのいの字さへ碌々書けぬ身には不似合な智恵者で、其上同情心
 に富んだ善良な女であるなど内外の事を考へてゐた。

百
斯うして待つてもく、所天は遂に歸らなかつた、其中に初夏の短
い夜は明けて、雨は未だ歇まずにシトシト降つてゐた、房子はト
ウウ／＼一睡もしなかつたのである。
あゝ所天清造は濱町の小粋な家で、現在今日此家から暇を取つて
去たお龍と一緒に、友人まで招んで酒を飲んでゐると知つたら何
うであらう、自分を欺く相談を凝らしてゐると知つたら何うであ
らう。

【二十六】 お杉の赤心

程なくお杉が起きて来て、
「奥様お早うございます」と、様先で手を支へたが、昨夜一夜を
まんじりともせぬ青ざめた房子の顔を凝乎と瞻入つて、
「おや、奥様夜前はお寢み遊ばさなかつたのですか」と訊ねた、

「あ、浴衣を縫ふてる中に夜が明けて了つて、ほゝゝ」
「まあ？、道理で何だかお顔色が悪うございますよ」
「爾うかい、別に何でもないんだけれど」
「奥様、旦那様がお歸りなさらないからつて、其様なに起きてゐ
らした日にや、是れから時々夜明しなさらないや成らないかも
知れませんかよ、ほゝゝゝ」
房子は恁麼ことを云ふお杉の言葉を失禮だと思つたけれど、別
に咎め立てする程でもないのので、
「何か昨夜は急に御用が出来たのだらうよ、恁麼事は滅多にあり
や仕ないだらうよ」
「爾うでせうかね……」と、お杉は丸い眼を据わて、心の中で
は人の好い奥様だと思つた。
「しかしねお奥様」と、物に怖れるやうに鳥渡後方を振り返つて、
「壓付けるやうな聲で、

「貴方昨夜旦那様のお歸りのないのを何うお思ひ遊ばす？」
「何うつて、別に何とも思やしないよ」
「へエー、ですけれど奥様、昨日龍さんが遽にお暇を戴いて歸つたでせう」

「あア」

「而して其晩に旦那様が何時になくお歸りなさらないのでせう、恁麼事申しちや何ですが、私しや何か是れには理由がありや仕

ないかと思ひますが、何うでせう？」

斯う云はれて見ると、流石の房子も好い氣は仕なたつたが、慎み

深い渠は色にも出さずに笑ひに紛らして了つた。

「ほゞ、眞逆ね」

「私しの邪推が當らなきや結構でございますが、奥様本統に御油

断なすつちや可けませんよ」と、お杉は念を押すやうに云つた、

而して持つて来たバケツの水を洗面器へ移して、

「お顔をお洗ひ遊ばしませ」と一禮して臺所へ退いた。

朝の食事の時、お杉は種々お龍の悪口を吐いた、横着でだらし

がなくて、縹緞自慢で男のやうに大膽であるなどお龍の平生を眼

に見るやうに話して、恁麼女であるから、昨日遽に出て去つたに

就ては甚麼綾があるかも知れぬから、必ず油断をしてはならぬ

と、心から新らしい主人を思ふ赤心で注意した。

清造は其日終日歸らなかつたが、平素會社を退けて來る午後五時

頃、腕車に乗つて陰氣な雨の中を威勢よく歸つて來た。

玄關へ迎へ出た房子を見て、清造は調子の好い聲で、

「やア弱つた、トウ、昨日は貧乏圖を引いて了つた、急に會

社の方から横濱へ出張さゝれて、昨夜は支店で殆んど徹夜同様

の目に遭つて了つた、へト、に疲れて了つた」と問はず語り

に辯解した、

「まあ爾うでしたの、嘘ぞお疲れなすつたでせう」と房子は所天

の帽子を取つて居間へ従ふた、
「疲れたも疲れないも、酷い目に遭つて了つた、しかし是れも勤
務だから詮方がない、房さんが来てから未だ一度も其様な事は
なかつたが、是れからは時々慥慥こそが、あるんだ」と高調子
に話しながら居間へ入る清造の後姿を、お杉は茶の間の方から見
送つて冷笑した。

【二十七】

心ご心

最近一年間、清造がお龍と一緒に生活してゐた其時の容子を知つ
てゐるお杉は、百年連添ふ筈の妻の房子よりも、清造の心裡は奥
の奥まで知つてゐた、会社の急用で横濱へ出張なごといふ、清造
の白々しい虚言が可笑しかつた、而して「あゝ奥様はお可哀さう
だ、慥うして旦那に欺されなさんだ」と、染々房子に同情してゐ

た。
慥慥炯眼な敵が控へてゐることは、清造は更に氣付かず、房子與し
易しと何處までも優しい妻を侮つて、殊更に機嫌の好い體を装つ
て其夜は房子の酌で晩酌を傾けた。
房子に酌させてチビ／＼飲みながら、會計課長といふ重用な地位
に在る自分は、社長や支配人と共に會社全體の重を双肩に荷つて
ゐるので、其繁忙さも他の社員と異り、製規の勤務時間外に社長
の宅で夜を明す事もあれば、支配人と協議に更かす事もあり、支
店の財政監督に出張したり、種々の事で家を明けねばならぬ事も
あるなど、辯舌巧みに房子を欺いた、素より優しい所天思ひの房
子は、其れが一々口から出放題の偽りであることは氣付かず、所天
の慥慥にまで繁忙しいのを心で悦びながら、神妙に聴いてゐた。
其れから後の清造は三日目位に家を明けた、而して此頃は會社が
莫迦に忙しいと口癖のやうに云ふてゐた、最初は房子も其言葉を

信じてゐたのであつたが、例の忠義者のお杉が、
 「それ何うでございます御覽遊ばせ、此頃の旦那様の他所でお泊
 り遊ばすこと、奥様本統に旦那様の旨いお口にお欺されなすつ
 ちや可けませんよ」と忠告して呉れるのや、清造の舉動の何と
 なくツハツハ沈着いてゐないので、若しや杉の言葉が眞實では
 なからうかと疑ひ初めた。
 けれど、嫉妬は女の最も慎むべきことである、房子は夙て母
 から戒められてゐたので、所天を疑ふ心は日に益し昂じては來た
 が、其様な顔色は兎の毛ほども見せなかつた、しかし、妻が所天
 を疑ふ心、所天が妻を欺く心、この二つの心と心は絶えず暗の
 中で闘つて、最ふ夫婦の間におそろしい間隔が出來てゐた、さら
 でも内氣で陰氣な房子は、清造が家に居る時、勉めて機嫌を取ら
 うとするのであつたが、その笑顔は何となく物淋しく、逆もキヤ
 ラ／＼した威勢の好いお龍には及ばなかつた。

清造はお龍の蓮葉な面白可笑しい氣象を喜ぶと共に、房子のしつ
 たりして優しい處も捨て難いと思つてゐたが、斯う心の間隔が出
 て來て見ると、房子の寂しい姿を見てゐるよりも、お龍の陽氣な
 活々とした方が快感を覺えた、而して最初は三日に一度お龍の方
 へ往つたのが、後には三日の間に二日はお龍の方で暮すやうに成
 った。
 それを主人思ひのお杉は口惜しがり或日出入の車夫を賺して清造
 の泊り先を確めた、而して其れが濱町三丁目の横丁であること聞い
 て、態々自分で濱町まで出掛けて往つて、お龍が奥様然と澄し込
 んでゐる處まで見届けて來て、
 「だから云はない事ぢやない、奥様のお人好しにも程があつたも
 んだ」と宛がら自分の事のやうに躍起となつて房子に告げた。
 其れを聞いた房子は、ホロリと一滴の露を零して低頭いた儘で、
 更に一言も云はなかつた。

【二十八】 幽靈抵當

所天の放埒？、房子は恚う云ふ事を考へた、自分は何故恚麼放埒な
 所天を持つたのであらう、連添う妻に偽つて外に隠し妻を持つや
 うな、節操もなければ愛情もない所天に、何故斯うして仕へねば
 ならぬのであらうか、二十七の歳まで縁のなかつた自分の、漸う
 のことで芽出度く纏つた縁は、恚麼苦勞をせねばならぬ縁であつ
 たのか、自分の運命は斯うも墓ない頼み少いものであつたのか。
 房子は清造の放埒を怨むよりも、自分の運命の拙いのを嘆じた、
 寧ろ此事を實家の兩親に話して、斷然離別して歸らうかと思つ
 た、けれども房子は直ぐ其れを思ひ直して、離別せうと思へば何
 時でも出来る、輕々しく爾ういふ事をして、年取つた兩親に苦勞
 を掛けるは人の子の道ではない、斯うした思ひをするのも、天か

ら自分に授かつた運命であらう、出来能ふ限りの忍耐をしたなら
 天運循環して所天の放埒の止む時機もあらう？、
 斯う考へた房子は、更に其考へに一步を進めて、所天が外に隠し
 妻を持つたりするのは、一つは妻たる自分が所天を慰める力が足
 りないからであらう、所天に快感を與へる事が少いからであらう
 と、最後に自己を責めた、而して其れから後は甚麼な時でも勉め
 て清造に笑顔を見せた、お龍と色を争ふためではなく、所天の快
 感を買ふため、房子は毎日髪を綺麗に櫛付けて鬢に一筋の後れ毛
 もなく、着てゐる不斷衣にも心を用ゐた、何といふ哀れに優しい
 心であらう。
 斯うして勉める心の誠心は、流石に軽い調子の清造にも感應した
 のか、其後清造の外泊は少し遠ざかつた。
 「あゝ妾の心が通じたのであらう」と房子は嬉しさ悦ばしさに思
 はず涙含んだ。

梅雨の季節は過ぎて土用に入った一日清造は平素より早く会社から退けて来て洋服を脱いで浴衣に着換る中にも、微かな溜息を洩らしてゐたが、見た處何となく面色も蒼白く、凝乎と考へ込んでゐる容子の音ならぬを見て所天思ひの房子は思はず摺寄つて訊ねた

「貴方何うかなすつて？、何だかお色が悪いやうですわ」

「うむ、別に何うも仕ないがね」と、椽端に胡坐を掻いてゐた清造は深い息を吐いて、

「少し心配な事が起つたのでねわ」

「心配な事、心配な事ッて貴方、甚麽ことが起つたのです？、」

「實は今まで房さんには隠してゐたが僕には非常に質の悪い借金が一つあるんだ」

と清造は又溜息を吐いた、

「金高は僅か一千圓計りだが、債権者の奴が極めて因業な高利貸で、人の皮を引剥いで肉を撈つて啖はうといふ奴だ」

「まあ其様な人に……」

「爾ういふ質の悪い奴から借りたのは僕の大失策だつたが、今と成つちや何うも取返しが付かない、其上僕から差入れた證書面には、抵當物件が記入してあるんだが、其抵當物件の地所といふのは、事實何にも無い幽霊地所で、一時の窮策で高利貸の奴を欺いたのだねわ、處が期限に成つても金を返さないもんだから、相當の手續きを履んで、其抵當物を取上げると云やがるんだ、先刻會社へ来て其談判をしたから、此處ちや困るから後に宅へ来て呉れと云つて追拂らつたから、纏てやつて来るだらう」

「まあ何うしたら可いのでせう？」

「何うにも斯うにも、罷り違へば其幽霊抵當の一件で、詐欺に陥らなきやならないからねわ」

恁麼談をしてゐる時、玄關で誰か人の聲がしたのを、清造は素早く聞付けて、

「やア来やがつた、高利貸だ、今話した山部といふ高利貸が来たんだ？」

【二十九】 五日の猶豫

玄關の人は果して其高利貸であつた山部權兵衛と名乗る、名を知らして因業さうな、年齢四十二三の背丈のひよる長いギス／＼顔の青白い眼と鼻の鋭い男で、古びた提靴を片手に、無遠慮に家の内中をキョロ／＼見廻しながら奥へ通つた、房子は此體を一目見て、謂ふに謂はれぬ悲しさが胸元に込み上げるのを覺わて、けれども房子は所天の指圖に従ひ、この鬼のやうな人間の前へ出て、團扇を進めたり煙草盆を出したり、氷を入れたサイダーを出したりして款待した。

上に、清造を上から睨み下げるやうにして、嵩にかゝつて喚き立てる山部の聲が、茶の間から耳を立て、聽いてゐる房子の胸へ轟々と響いた。

「しかし堀川さん、貴方も△△会社の會計課長までお勤めなさる立派な御身分ぢやありませんか、△△会社の堀川さんと云へば實業界では誰でも知つて居ります、爾ういふ御立派な御身分で

ありながら、今回のやうな詐欺的行爲をなさるとは實に呆れる外はありません、」

「詐欺的行爲とは何ですか？」

清造の聲は稍顛へてゐた、
「は、は、は、堀川さん、貴方は此の山部を見損なつてゐますね、斯う見わたつて山部は一筋縄ではいかぬ男です、其れ位の事を知らないで此の稼業が成りますか、私や最初からチャンと知

「ふむ、では最う一度欺される氣で爾ういふ事に」
「欺される氣は甚い、はゝゝ」
「欺す事に掛けては中々巧妙でゐらつしやるから、へゝへゝゝ、
では今日頂戴します此の百圓に對しては別に請取は差上げませ
ん」

「よろしい」

何うやら其れだけで一時談判は終つたらしい、而して山部は清
造から百圓の小切手を請取つたと見えて、來た時の横柄なのと反
對に、鄭率に挨拶して歸つて了つた。

房子は始めて蘇生の思ひをしたのであつたが、
「おい房子、房さん」と氣急しく奥から呼立てる所天の聲がした。

【三十】 山部の正體

格子戸口に「久米井龍子」といふ、新しい陶器の表札を出した濱町
三丁目のお龍の家では、又奥の八疊で酒宴が始まつてゐた、
明放した椽から冷たい夜風が吹込んで、軒に吊るした硝子製の風
鈴が時々チリ、ン、と鳴つた。

煙突のやうに麥酒瓶を并べた食卓の中に、その周圍をぐるりと取
り巻いたのは、荒い瀧織の浴衣を着た堀川清造と、同じ浴衣を着
た例の三味線胴の秋山種郎で、他に一人、羽織も脱がずに、眞面
目腐つて坐つてゐるのは、今日氷川町の家へ清造を攻めに來た、
高利貸の山部權兵衛であつた、其間を周旋する白地の浴衣に黒襦
子の帯をしめたお龍が、今夜は非常に婀娜ッぼく見えた。
今日那麽ほど嚴酷しい催促をした高利貸の山部權が、再び此處に斯



うして姿を現したのは、晝の催促では未だ満足が出来ず、更に清造の後を追ふて慙慙ところへまで談判に來たのであらうか、其れは此處に團樂の主客の談話を聞けば、自からソレと顔かれるのである。

「君莫迦に眞面目ぢやないか、遠慮なしに大にやつて呉れ給へ」
と、清造はユツプを杯洗の水に入れて、ガバリと音を立て、濺いで、山部に献じた。

山部は陰險な顔にニヤリと笑を湛へて

「は、先刻から非常に頂戴したです」
と、ユツプを受取つてナミナミとお龍に酌いで貰ひ、それを美味さうに舌鼓して呑んだ。

「兎に角君の今日の技倆には驚いたよ立派な高利貸に成り澄してビシビシ僕に談じ付ける手際は豪いもので第一流の名優だつて恐らく那磨だけの藝は演てまいと思つたよ、失敬な事を云ふやうだが、流石は秋山が選定した人物だけあつてと、僕は全然感

心して了つた」

「は、ムム、其様なに巧妙かつたかね」と秋山は自ら人を見るの明ありといふ誇りを現して、

「一時は此の役廻りを吾輩自身で演つて見やうかとも思つたが、君の妻君は幸ひ吾輩の顔を知るまいが、下女のお杉めが能く知るからね、其れも拙いと思つて、種々考案の上、選定したのがこの山本君さ、此男は今不幸にして砲兵工廠の職工にまで墮落してるが、元は早稲田の文科に通つてゐた事もあつて、時々素人芝居などして喝采を博したといふ経歴があるんぢや、先生吾輩の隣家に妻君と二人暮して暢氣な生活をしてゐるんだが、平生の悪意に甘へて、今度の一件を依頼したのだ、は、ムム、しかし成功は何よりだ」

「うむ大成効、妻の奴め、全然眞物と思つて了つて青く成つたよ」
「本統に罪な方ね」
とお龍は口を挟んだ、



「は、は、は、少しは罪かも知れないが、詮方がないさ」
 「うむ、而して妻君何と云つた？」
 「何も斯にも非常に心配して居る處だから、其處に付け込んで、僕
 が涙を流さんばかりにして説付けると、妻の奴何の苦もなくコ
 ロリと参つて、明日本郷の親父のところへ往つて、立派に談判
 して取つて來るといふ事だは、は、は、は、と、清造は得意氣に高
 笑ひしてガブ、と麥酒を呑んだ。
 渠は自分に恚怒不徳な行ひをしながら徹座も良心に羞てゐる容子
 はなかつた而して愉快さうに話しながら十二時過まで飲んでゐた。

【三十一】 貞節な妻

高利貸山部権兵衛と化けて巧みに房子を欺いたこの山本といふ男
 は、見た處甚麼悪人かと思はれる悪い人相はしてゐるけれど、極



めて悪意のない單純な男で、自分で早稲田の文科に居た事があ
 ると云つてゐるが、其れも何うだか分つたものではなかつた、毎
 朝六時の時計で家を出て、終日砲兵工廠で眞黒になつて働いた上
 夕方疲れた足を引摺り、歸つて來て、若い妻君の酌で一合の晩
 酌を傾けるのを無上の快樂としてゐた、最う工廠通ひを始めてか
 ら五年になるので、小金も少々は貯蓄してゐるといふ評判で、先
 づ世間並に洩れぬ平々凡々たる人物であつた、碁が一寸上手な處
 から、何時か秋山と基敵になつて屢々出入するのであつたが秋山
 はこの人物の演劇好で、暇さへあれば芝居の臺詞めいた事を喋つ
 てゐると、人相が什麼も因業な高利貸然としてゐる處から思ひ
 付き、十圓の報酬をするといふ條件でこの男を説付け、恚怒演劇
 めいた狂言をさせたのであつたが、其れが眞物以上に上出来であ
 つた、清造から口を極めて褒められたのと、久しく口にした事
 もない馳走を饗はれたので、渠は嬉しさに酒量のないところへ

頻りに麥酒のコツアを重ねた、而して妻君へ土産の料理の折詰と
十圓の報酬を貰つて、江戸川行の最終電車に乗り遅れまじと、大
喜悦で秋山と二人で歸つた。

二人を送り出してから、清造は平素になく遽に歸り仕度をして、
「ごりや俺や歸るとせう、電車は無くならない中に」と云つた。

「おやお歸んなさるの、何故、何故お歸んなさるの、今夜に限つ
て」とお龍は險な眼をして清造を睨んだ、

「は、分らないね、君は、今夜だから歸るのさ、明日は房子が
本郷へ行くと云つてゐるんだから、今夜家を明けちや非常に拙

い、何しろ今夜は歸つて、彼奴の感情を害さぬやうに仕て措か
ないよ、五千圓が飛んで了うからねね」

「は、只つた五千圓位なお金が其様に尊いの？」とお龍は
冷笑した。

公家華族の落胤であるなど、大層な法螺を吹くほどの女だけに

お龍の頭脳には金などいふ念慮は少しもなかつた、是れまで可
なり金のためには苦勞を仕た事もあつたが、其れが一向身に沁ま
ぬのか、金といふ話しになるとお龍は何時か斯うした態度を見せ
た、其れを能く知つてゐる清造は、別に氣にもさへねば争ひもし
なかつた、

「まあ何でも可い、兎に角今夜は歸るとせう」と、急いで表へ出
た。

清造が家へ歸つた時には、最う十二時すつと廻つてゐた、其れで
も房子は例に依つて寝もせず、何時でも畑の出来るやうに鐵瓶

の湯をわかし、チヤンと膳拵へをして待つてゐた、其れを見た清
造は流石に悪い氣はしなかつた、この貞節な妻を欺く自分とは思

つて、何となく愧かしいやうな氣がした。
それでも清造は未だ本心に立歸るほどの勇氣はなくて、
「房さんに計り心配させても何だと思つて、今夜は心當りを片ッ

態端から奔走して見たが、何うも思はしい結果を得なかつた」と

【三十二】 水蜜桃

「不可、そりや可かん」

田太一は右左に首を掉つた、昔の官吏氣質の四角四面の上に、漢

筋に所天の身を思ふ赤心から、何うなりともして所天の今の急場

て金の要るといふ事を父に告げた、無論高利貸から不義理な借金

「分つた、話しは能く分つた、しかし彼の金はお前の身に附いた

けた清造君にも釋つてゐさうなものぢや」と承知して呉れなかつた。

何事でも一旦斯うと信じて口から外へ出した言葉は、甚麽事があるつても一歩たりとも後へ引かぬが、父の平素の氣象であるといふことは、房子も能く心得てゐたが、今の場合、何と云つても其れを待つて歸らねば所々の急場を救ふ事が出来ないのであると、房子は押返して是非にと頼んだ、曾て親に向つて口返答した例のない房子も、此時ばかりは多少顔を赤めて父と争ふた、自分の身に附いた持參金なら、自分が其れを婚家へ持つて行くは當然である、とまで主張した、けれども義一は斷乎として聞入れなかつた。

房子は再び返すべき辭がなく、力なげに差俯いて疑乎と考へ込んだ、午前十一時の太陽が烈々として庭を照付け、父が自慢の松の樹の枝で頻りに蟬が鳴いてゐた、父が自慢の松の樹の枝で頻りに蟬が鳴いてゐた、父の問答を他ながらに聴いてゐた母親の辰子は、グラスの鉢に

盛つた氷で冷した水蜜桃を持つて来て、義一と房子の間へ置いた、而して所々の顔と娘の顔を、不安さうな眼光で交る、
「しかし貴方、房子が恁處ここ云ふて来るのは、よくくの事があるのでせうよ、何とか好い思案はないものでせうかね」と、母は母だけに優しい口を添へた。

義一は其れには一言の返答もせず、老ひても未だ衰へぬ太い岩丈な手をぬつと伸して、水蜜桃を取上げてムシヤムシヤ食べてゐた

【三十三】

天地自然の理法

子といふものは満鐵の役人に成つて満洲へ赴任してゐる長男とこの房子との只二人切りである義一には、房子が可愛くて可愛くて成らなかつた、水蜜を食ひながら其可愛い房子を凝乎と見てゐた義一は家に居る頃に較べると娘の俤に何處ともなく寝れの見

るやうに感じた、嫁付いて未だ間もないのに、最う恚恨ことを親に云つて來ねばならぬ境遇に成つたのかと、其れがいちらしくていちらしく成らなかつた、美しい丸鬘を父の方に見せて、白絹手巾を膝の上で弄りながら、左も物思はしげに頸垂れてゐる姿が哀れに悲しげに見えた。

「好い思案も悪い思案も、あの金は俺が何處までも保管して置くより他に甚麽もない、其れが房子のためぢや今あれを渡して遣るは何でもないが今に屹と彼の金の必用が出て來る」
「その必用が今出て來てゐるのですから、何うかお父さん妾を助けて遣ると思召して」と、房子は俯頭しながら小さい聲で云つた。
「いや、今の必用は俺の腑に落ちぬ、今に子供でも出來て見い、屹と要る今は未だ早い」

「けれど能々の事でなければ、房子も斯うしてお願ひに出はしますまいから」と辰子は女だけに娘のために加勢した。
「そりや分つさる、要るから來たのは分つさる、しかし其用途が俺の氣に入らんぢや、清造君の今の地位は何ぢや、△△會社の會計を預つさる人ぢやないか苟くも一會社の出納を司る、其様な責任の重い、信用を要する地位に居ながら、株式などに手を出すと云ふ事があるか、爾ういふ心得では今の地位さへ危い俺は何時房子が甚麽境遇に陥るか、今から其れが案じられてならぬ」
「一の言葉は眞に肺肝から絞り出るやうに聞いた、房子は胸が塞がつて、聲を立て、泣きたいやうに覺えた。
「其様な相場などに失敗した穴填を、房子の持參金でさすことは斷じて出來ない、清造君も男子なら、自分でした失敗は自分で處分するが可い、妻の持參金を目的にするなどは男子として實

に愧づべき事ぢや、斯ういふ理由で俺は今日の房子の頼みには
 應づる事が出来ない、それに何ぢや清造君は相應の資産があつ
 て、二千や三千の端的金に不自由する男ぢやないと聞いとつた
 が」と房子を見下した、
 「それは地所だの家屋だのといふ不動産ばかりで……」
 「うむ、動産は無いといふのか、其れも可い、無けりや無いで可
 い、たとひ動産不動産共に丸切り無いとしても、一旦俺が承知
 して嫁付けた以上は今更彼是は云はぬ、しかしお前の身に附け
 た金は、お前の前途のために俺が保管して置く、遠慮なきも
 のは近き思ありと云つて、中々軽卒な事は出来ない、分つたか
 の」
 房子は只頷いた。
 辰子はそれでも娘のために種々と辯護して、切ては其金の半分だ
 けでも房子に渡して遣つて呉れと頼んだ、爾うすれば房子が所天

に對する顔も立つと口説き立てた、その言葉に少しは動かされた
 のか、
 「うむ、何と云つても俺の考へは動かぬが、俺は房子が所天のた
 めに斯うして此處へ来た心を嘉する、女は斯うなうてはならぬ
 今の學問をした奴は、婦人の権利が何うの、女子が男子に壓迫
 しられて本能を没却しゐれる理由はないとか、女子も最う時代
 に伴つて自覺せねばならぬとか謂ふやうぢやが、俺は其説を執
 らん男子は天、女子は地、天地陰陽の道理は動かす事が出来な
 い女子は何處までも柔順の徳を養つて、男子の剛を補けて行か
 ねばならぬ、消極ばかりでは物事は不可い、積極と消極と相俟
 つて始めて物の用を爲すのぢや、これが天地自然の理法で、天
 が人に男女の區別を設けた所以ぢや、別けて我日本國の臣民は
 何處までも祖宗の教に従ひ、民は君に忠に、子は父に孝に、婦
 は夫に貞でなければならぬのぢや。」

房子が所天のために斯うして来たのは俺の氣に入つた、何うぞ
 今の心を忘れず、何時までも其心で居つて呉れ、俺は房子のた
 めに今日の褒美として、彼の金の中から云はず、別に五百圓
 だけ房子に遣る、其れは房子が何に使用しやうと勝手ちや」
 慙う云つてつと身を起した義一は机の前へ座つて、銀行切手に五
 百圓の記入をした、房子は父の慈愛の深さに不知不識に溢れて出
 る感涙を、密に手巾で押へた。
 少時鳴歌んでゐた蟬は、また高い暑苦しい聲で鳴立てた。

【三十四】 一場の悲劇

久々に親子三人楽しい午の食事を済ました後、房子は両親が交る
 交るに、今が暑い最中も少し片影になつてからと止めるのを辭
 して、待たして置いた俵に乗つて東片町の實家を出た。

烈しい夏の眞盛り、日光は煌々と俵の透し幌を照して、むつと蒸
 されるやうな暑さが、シリシリと皮膚に浸るやうな氣がした、
 慙うして本郷から赤阪へ行く、短からぬ途中を房子は黙々考へた、
 慈愛の深い父の言葉、優しい母の助言、其れを嬉しいと思ふにつ
 けても、所天の使命を充分に果たして歸る事の出来ぬ自分、腑甲斐
 ないと思つた、父が情けの五百圓の銀行切手は確乎と懐中には入
 れてゐるが、千圓以上の差迫つた負債に苦しむ所天に、その半分
 の小切手を見せた時、若しや腹を立てられはすまいかとも思つた、
 けれど、徹頭固な父が那の言葉には逆らふ事が出来ぬよしや
 逆らへばとて其れを聞入れる父ではない、寧ろ素直に是れだけで
 も持つて来たのは大手柄であらう、しかし所天は其れを手柄とは
 思つて呉れまい。
 小田巻の糸を手繰るやうに、慙慮ことを其れから其れへと考へて

る中、傳は稍風の冷しい丸の中を通り抜けて、赤阪見附の長い

阪を鈴の音高く威勢よく降りるのであつた。

其時、辨慶橋の方から此方をさして、眞一文字に駆けて来た護謨

輪があつた洋服を着てバナマの帽子を被つた車上の若紳士は「や

あ折田さん？」と聲を掛けて傳を停めさせた。

「おや塚田さんでございませうか」と、房子は思はずさつと顔を

赤めて、車上ながら慌て、挨拶した。

互ひの車夫が心得て傳が双方から道の片脇へ寄ると、塚田と呼ば

れた若紳士は、房子の丸髷を不審さうに見ながら、

「非常に御無沙汰しました、實は彼の後丸一年ばかり朝鮮の方へ

行つて居りましたので」

「何うか爾ういふ事に伺つて居りました」

「實は先月また當地の本店へ轉任して来たのですが、何かと取紛れ

て御伺ひも仕ませんでした、御兩親共御壯健ですか」

「は、難有うございます、お蔭様で不異健康でございます」

「や、其れは何より、何れ近日御伺ひするですが何うか宜しく」

と塚田紳士は又今更のやうに染々房子の頭を見た、而して何とな

く不安な眼光をしながら、

「お見受けする處何ですが、貴嬢矢張り本郷のお宅においでやす

か」

「いに、只今は赤阪の方に、氷川町で堀川とお聞き下さいました

ら能く分ります、何うか些と……」と斯う云つた房子の顔には

暑さのみではない紅が散つてゐた。

「おう其れでは御嫁付に成つたのですね、堀川さんと、堀川さん

といふのは△△会社の堀川さんぢやないですか」

「は、左様で、ほゝゝ」

「堀川さんなら私も一二度銀行の用務でお目に蒐つた事がありま

す、何れ改めて御伺ひするです」と塚田紳士の態度は何となく

京子の紹介で始めて時雄に逢つた時から、房子は時雄を前途多望の人物と見て懐かしく思つてゐた、時雄も又、房子の多くの女學生とは異つた女らしい柔順な點や、美しい容貌に心を動かしてゐたと見えて、渠が學校を卒業する二三月月前、或時房子に向つて慇懃いふ事を云つた、

「房子さん、貴嬢は若し私が貴嬢に結婚を申込むやうな事があつたら、其時は何うなさいます、譯もなく拒絶するでせうね？」

それを聞いた房子は強い電氣に打たれたやうに感じたが、慎み深い房子は、

「妾其様なこと存じませぬわ、ほゝゝ」と笑ひに紛らした。

けれども時雄は追窮して、

「冗談ぢやないです、僕は本氣で云つてるんです、若し果して其んな場合があつたら、貴嬢は何ういふ態度に出られるか、豫じめ其れが聞いて置きたいのです、僕も最う直ぐ卒業する身分で

すから……」

房子は嬉しさに身も浮く計りに感じたが、其れでも慎みの心は何處までも亂れなかつた、而して恥かしさを凝乎と堪へて、神々しいほど謹嚴な態度に成つて、

「妾には両親がありますから、両親の許しを得ませぬ中は、爾ういふお答へは仕懸うございませぬ……」と云つて了つた。

この言葉を時雄は何と聞いたか、鳥渡不快な顔をして、其談は其れ切りで最う云出さなかつた。

其後の房子は甚麼東西かの暗示を與へられたやうな氣がして、何となく心が落着かなかつた、時雄から又何か云はれはすまいかと、いふ不安が、絶えず胸を搔亂した、両親から時雄の事に就て何か話しはなからうかと毎日のやうに待憶れてゐた。

其中に時雄は優等で卒業した、間もなく〇〇銀行へ入つた、然し何時まで經つても両親からも時雄からも何の話しもないのを、房

子は非常に物足らぬ事に思つた。
或日、房子は俄然、同窓の友である京子と時雄が結婚した通知を受けた、而已ならず其披露の宴への招待状を受取つた、房子はその招待状を凝視つて人知れず泣いた。
無論房子は其披露宴には列しなかつた平素は姉妹のやうに睦み合つた親友の京子が、一世一代の晴れの宴席とは知りつゝ……。

【三十六】

顔色

只そればかりではなかつた、時雄と京子の新郎新婦は、其後美々しく着飾つて房子の家へ遊びに来た、房子は其れと應接するのを眞に辛い事とは思つたが、慎みといふ事を婦人の最大要件であると思ひ、信じてゐる彼女は、昔に異らず愛想よく款待して、爾ういふ思ひは色にも見せなかつたのであつた。

是等が房子の縁談に多少かゝのついた一つにもなつて、其後房子には思はしい良縁もなかつたが、不思議に今の所天の清造とは談が纏つて、斯うして身を固める事に成つたのであつた。
斯ういふ入組んだ關係を持つた塚田時雄を思ひ懸けもなく、突然途中で逢つたのみか、一時は當の敵であるまで思つた京子の計を聞いたので、房子は非常な感慨に打たれて、今まで種々に思ひを聞いてゐた所天の使命の事は忘れて、俾に揺られながら古い以前にの記憶を辿つた。
俾が我家の前に着いたので、房子は夢から覺めたやうハツと我に戻つた、其時、忠義者のお杉は最う俾の音を聞付けて内から駆出してゐた。
「お歸り遊ばせ、まあお暑うございましたらう、若い衆さん御苦勞でしたねわ」と、汗を拭いてゐる、車夫に如才なく世辭を云つて、お杉は主人の後ろから内へ入りながら、

「あの奥様旦那様がお歸りでございましたよ」
 「おや爾うかい、今日は大層お早いなだね」
 「何、何だか存じませんが、お午の時刻お歸りなさいまして、未だかッてお待ち兼です」
 偕は所天は今日の結果を案じて、會社を早退けして歸られたのであらうと思ひながら、房子も急々奥へ行つた、
 「おう歸つたか、御苦勞々々々々、外は暑かつたらう、今日は特別に暑い日だから、俵だつて何だつて堪つたものぢやない、御苦勞々々々々、恐縮だつた」こ、清造は両手で捧げるやうにして、世辭を云ひ、房子を迎へた、其れが房子に取つては却つて辛かつた。
 清造は房子が挨拶する間を待ちかねて
 「どころで何うだつた、一件は、僕も其事が氣に蒐るので、今日は三田村に事務を頼んで早退きして來たが、先刻から斯うして

待つてる中も、何だか氣が氣ぢやなかつた、お父さん何と仰しやつた、多分良かつたらうね」と、立てつけに攻立てた。
 「は、父からも母からも宜しくと申しました」と、房子は曖昧な事を云つてモザクしながら、
 「實は何でしたの」と、冒頭して、父が何うしても持參金の五千圓は渡して呉れぬ事を、成るべく所天の感情に觸らぬやうに話して「しかし折角來たのだから、彼の五千圓の以外に、今日は是れだけお前に遣るからと申しましてね」と鄭率に縮緬の袱紗に包んだ銀行切手を取出し、清造の顔色を窺ひつゝ密と差出した。
 「逆も是れだけぢや足りないでせうけれど……、一旦云出したら中々きかぬ那麽頑固な人ですから……」
 「何だ五百圓？」
 清造の顔色は俄に變つた、而して睨むやうに凝乎と房子を見た。

【三十七】 一 條件

爾うでなくてさへ、是れだけでは所天の氣に入るまい、いや急場
の入用の額に足らぬため嘸失望をしられるであらうと、優しい心
で途中からも案じて来た房子は遂に變つた所天の顔を見て胸が轟
いた。

思はず知らず俯いて了う房子の額際を清造は稍少時無言で睨み詰
めてゐたが聽て押出すやうな溜息を吐いて、

「元利合して千三百圓ばかりある處へ是れつきりぢや詮方がない」
と云つた。

「妾も爾う思ひましたので、父が五千圓悉な出して呉れませんが
も、切めて其半分だけでもと思ひまして、母と二人で種々頼み
ましたのですが、那麼頑固な人なもんですから……」

と、房子は氣兼ねさうに辯解した。

「詮方がありません」

と、清造は切口上で稍聲高に成つて、

「詰りお父様が僕を信用なさらないんだねわ」

「其様なことはございませぬわ」

「いや、爾うだ、この堀川清造といふ者を信用して下さらないの
だ、若し聊でも信用があつたなら、自分の娘の持參金として結
婚の一條件に成つてゐる金を、何時までも手許に保管して置く
なんて其様な道理はない筈だ、房さんの前で慙懣ことを云つた
ら何だが、持參金と云へば當然妻が所天の家へ持參して来る性
質の物で、妻の承諾さへあつたら、所天が自分の有として使つ
ても差支へない筈のもんだ」

「は、そりや爾うですとも……」

「それを子供が出来るまでとか、何とか云つて容易に渡されぬい

のは、詰り聳たる僕を信用せられんからだ、放蕩無頼で直ぐ浪費して了うだらうと思つてゐられるからだ」
思々しうに斯う云ふ所天の言葉を味ふて見れば、全然理のない不平でもないので、房子は何とも云へぬ辛さを感じた。

「は、は、は、は、」
と清造は押出し笑ひをして、

「詮方がない、これも僕に徳がないからだ、あゝ、厭に成つたう、百年の苦樂を俱にせうといふ妻の親にさへ信用がないんだもの」

と、捨鉢のやうな嫌味を云つたが、何と思つたのか、清造は急に色を和らげた。

「詰らん愚痴を云つ了つた、は、は、は、おい何うしたんだ、何だか考へ込んでゐるぢやないか、僕が慥慥ことを云つたんで感情を害したんだらう、僕もつい氣がいらくしてゐるので、口から出

任せの事を云つて退けたが悪く思はないでお呉れ、慥慥に暑い處を態々本郷まで行つて呉れたお前の好志は感謝するよ、しかしマア難有い、五百圓でも何程でも、無いより有る方が餘程難有い」

と、銀行切手を戴いた、實際彼は持參金の全部を手に入れる目算の外れたので、折角巧んだ計略の齟齬したのに少しは腹が立つたが、賤しい心の彼は、五百圓の小切手を見ては流石に悪い氣もしなかつた。

「兎に角何だ、是れだけあれば、高利貸の方は何とか談判がつくだらう」

「何うか爾うなれば宜しいけれど……」

「成るも成らないも、成らさなきや仕方がない、ぢや何だ、慥慥ことは一刻も早い方がいいから、僕は是れから直ぐ銀行へ行つてこれを取付けて、其足で高利貸の許へ行つて來るとせう、幸ひ

是れだけで話しがつけば、妻君のお蔭で急場が助かつたといふものだ、はゝゝゝ」
清造は妻の赤心を感謝してゐるやうな其額の不足なのを嘲つてゐるやうな、頗る暖味な言を云ひながら、周章てたやうにソワソワ身仕度をして出て行つた。
悄悄と所天を送り出した房子は、双の眼に一杯の露を溜めてゐた。

【三十八】 古い昔の傷

土用が明けてから朝夕は少し涼しく成つたやうな氣もするが日中の残暑は實に金を鎔かすの諺に反かなかつた、その炎熱焼くが如き午後三時頃、房子は珍らしく座敷で訪問客の相手をしてゐた。客といふのは何時か房子が途中で逢ふた塚田時雄で、什麼も銀行員らしい蕭洒な服装をして、美しい下鼻の鬚を捻りく、柔和な

顔に笑を満へて快活に話してゐた。
「爾うですか、堀川君はお留守ですか、其れは残念でした、今日は日曜だし、恁處に暑いから何處へもお出掛けはなからうと思つて、久々でお目に蒐り、また貴女にも御無沙汰のお詫を致さうと思つて伺つたのでしたが、御主人が御不在では何でした、はゝゝゝ、何ですか大抵夜なら御在宅ですか」
「は、大抵は居りますが、何分繁忙しい身體です、何時宅に居りますとも……、はゝゝゝ」
房子は何氣なく應へたが、胸の中では謂ふべからざる悲しさを覺えた、斯うして來客が所天の在否を訊ねても、其れに對して確乎とした返答が出来ぬとは、何たる情けない事であらうと思つた、房子が實家の父から那の小切手を貰つて來てから此方へといふもの、清造は其後高利貸の方は何う埒が着いたとも房子には話さず、訊ねれば暖味な返答をして、爾來二十日程の間、家を外にして歸

る日は稀であつた。

「は、爾うでせう、私等のやうな銀行家とは違つて、堀川君は會社の方で中々御多忙でせう、大會社の要路にお出の方には御交際が其れから其れへと繁激ですから」と時雄は如才のない挨拶をして、

「私は實の處御主人より貴女の方に御懇意なのですから、貴女にお目に蒐りさへすれば其れで可いのです」

「恁麼ことを云ひながら、昨日今日の苦勞で何處ともなしに寝られた房子の顔を凝乎と見て、

「しかし房子さん、僕の氣の故かは知らんが、何だか貴女はお瘦せなすつたやうに見ゆるですね、何處かお悪いのぢやないですか、お顔の色もお悪いやうだし」

「まあ、其様なでございませうかしら、別に何處も悪いのぢやございませうが……」

房子は密と我と我頬を撫つた、

「大概夏瘦を致したのでせう、ほ、ほ」

「其れなら宜しいが、京子が矢張り初めは貴女のやうでしたので

何となく心配でならないです、京子のやうな彼様な氣の勝つた

方の女でも、病氣には勝てないものと見て、トウトウ那麼こ

とに成つて了つたです、貴女は京子と異つて昔から極く内

氣の方でゐられるから、成るだけ氣をお付けなさるが宜しい、

殊に人間は心配が一番毒ですから、少々氣になさる事があつて

も、放任主義に考へないが可いですが、貴女と私は京子と

同じ時からの御交際で、失禮ながら他人のやうな氣がしないで

何だか妹のやうに思はれるですから、心配でならんです」

「は、難有う、しかし妾本統に何處も悪くはないのですわ」

と寂しく笑つたが、此人から恁麼に染々とした親切らしいことを云はれると、何だか古い昔の傷口をいぢられるやうな氣がして房

子は心の中を掻亂されるやうな気がした、久しく逢はなかつたので、態々斯うして訪ねて来て呉れたのではあらうけれど、早く歸つて呉れれば可いと思つた。

【三十九】

偽らざる誠

斯うして一時間餘も種々の世間噺をした上時雄は辭し去つた、房子は何だか肩から重い荷を下したやうな気がしてホッと吐息しながら力なげに座敷から茶の間へ戻つた。

「おや、お客様は最うお歸り遊ばしたのでございますか」

と、お杉は今まで居眠りでもしてゐたのか、前に擴げてゐた縫物を手早く片寄せ、周章たやうな眼をして房子を瞻た、

「ほゝゝゝお歸りだつたよ」

「ほゝゝゝ何て人間でございませう私しは」

「何だい？」

「斯うして居ります中に、つい気がたるんで不知不識舟を漕いで居つたのでございますよ、何て莫迦でございませうお客様のお歸りも存じませんで、御免遊ばしませ」

「ほゝゝ、そりやお前、恁麼に日が長いんだもの、誰だつて眠いよ、お前ばかりぢやない、妾だつて黙然としてゐりや睡氣がさして来るもの」

「しかし呆れましたよ、自分ながら、以來氣を付けますから何うか……………」

「おほゝゝ、大層恐縮したのね」

只鳥渡恁麼對話にもこの主従の偽らざる誠は自ら言外に溢れてゐた。

「だが、最う何時だらうね」と房子は振返つて茶棚の上の置時計を見た、お杉も同じく時計を見て、

「おや最う四時でございます、そろくお夜食の仕度を致さなけりや」

お杉は獨白のやうに云つて縫物を疊み初めた、房子はそれを見ながら、

「今夜は旦那様のお着には何があつたい？」

「は、何でございます、旦那様の？、今日も矢張り用意を致しませんで？」

「あゝ爾うだよ」

「でも奥様、無駄ぢやございませんか、毎日々々奥様が御夜食の用意をしてお待ち遊ばすのに、些こともお歸りなさらないぢやございませんか、今夜も屹とお歸りはございませんよ、丸で暗中で舞踊を踊つてるやうな氣が致しますわ、憎らしい！」

お杉は我事のやうに腹を立て、手荒く縫物を疊み了つた、而して聲に力を入れて、

「本統に無駄ですから、お廢し遊ばせ」

「爾うはいかないの假令お歸りがあつてもなくても、何日何時お歸りなさるかも知れないのだから、ヤヤンと其準備をして置の

が妾の務だもの」

「本統に奥様はお人が好くつてゐらっしゃいますよ、ですから旦那様が莫迦になさるんです、今少しピンと辛い點を見せてお進

げ遊ばさぬと癖になります、私しなんかは何です、亭主が夜泊

りなにか致しました時は一日口も何も利かなかつたものです

それで先で愚圖々々云へば突然胸倉へ喰ひ付いてやりました」

「は、大變な權幕ね」

「は、其位で丁度好い加減ですよ、男てものは餘り此方で大事にするご増長するものです」

「旦那様も餘りお酷ふございますもの、奥様が恁麼に御親切にな

すつてゐらつしやるのに、内を外に遊ばすんですもの屹と例の濱町の方へ溺り込んでゐらつしるんです、本統に彼のお龍ッて奴ア大悪魔でございますよ畜生今に見ろ、私の思ひでだつて碌で置きやしやい」

お杉は腹立紛れにお龍を呪ふた、

「ですから、旦那様の御飯の用意なんかお廢し遊ばせ」

房子は寂しく笑ひながら、

「でもね、こりや妾の主義だから、面倒でも仕ておくれ」

「へい、爾うですか」と、お杉は腹の中で房子のお心好しを齒痒く思つた而して其儘立上つて臺所へ入つたが十分も経つたかと思ふ頃、彼はバツ／＼と駈上つて来た、

「奥様々々お歸でしたよ旦那が、只今御門をお入り遊ばしました」

【四十】昔馴染

世の諺は果して人を欺かなかつた、お杉の噂に影はさして清造は久々で歸つて来た、甚麼東西にか心奪れた渠も、流石に自分の家の戸口は見忘れずに洒乎洒乎として歸つて来た、

「あゝ暑い、莫迦に暑い、何だつて恁麼に宅は暑いだらう」

と、清造は浴衣に着換た胸をひろげバツ／＼團扇づかひしながら、

「ビールはあるか、ビールは」

「は、あの直ぐ取りに遣りませう」さまじくする房子を、睨むやうに見て、

「無い？、ちねッ、僕が歸りや麥酒を飲むッて事は分つてるぢやないか、氣が利かないにも程があるね、早く取りに遣り給へ早く」

と、清造は久々で歸つた極りの悪さを隠すためビールに力を借らうとするのだ、己れの不都合を覆ふため哀れなる妻を叱るのだ。

恁麼に云はれても房子は腹を立てなかつた、自分は何と云はれて

も、叱られても家として其家の柱たる所天の、内を外にして居るよりも、愆うして家に居られるのが好いと思つた、その優しい心遣ひを清造は能く噛みしめることが出来ないのか、程なく房子が心盡しの肴とビールを持つて来た時、清造はコップを差出して酌がせながらシロリと床の間を睨んだ、

「アノは何だ？」と問ふた、

床の間には先刻塚田時雄が手土産に持つて来た、色彩美しい水菓子の籠が置いてあつた。

「あれアノ塚田さんが持つてゐらしたので……」

と房子は何となく後ろ暗いやうに覺えて、何處ともなしに言葉が濁つた、

「塚田？、塚田ッて誰だ、塚田、覺えんなア、ハ、ハ、ハ、」

「〇〇銀行の塚田時雄といふ方です、先達てまで朝鮮の方に行つておいでだつたし」

「む、彼の塚田か、ふむ、その塚田が何だつて恁麼物持つて来たんだ」

「あのウ何ですの彼の方妾前から知つてゐたのですが、此の間本郷へ参りました時、測らず途中でお目に蒐つたので其時妾が此方へ嫁付いて居ると申しましたから、△△會社の堀川君なら私もお目に蒐つた事があるから、何れ近日改めて伺ひますと仰しやつてゐましたが、先刻挨拶かたぐいお越でだつたのです」

斯ういふ中にも清造の眼は訝しく光つた。

「ふむ、ちや何だね、房さんの昔馴染だね」

「は、彼の方の奥様の京子といふ方が妾と同窓でしたので……」

「詰り此家へ来ない中からの知人なんだ」

房子はこの言葉を不愉快に聞いた、
「それが舊交を温めるため、僕よりも房さんを主にして今日訪問して来たんだね、そりや御愉快だつたらう、はハハハ」

「おや、貴方何だか變なこと仰しやるわ」
 「は、宜しい、まあ何でも宜い、僕は彼様な塚田なんて奴は懇
 意にしないんだから何うでも可い、房さんの友人なら其れで可
 い、僕ア近頃つい會社の方が忙しいもんだから内を外にして居
 たんだから、は、は、は」
 房子は情けない事を云はれると思つて黙つて俯向いてゐた。
 清造は忌々しげに水菓子の籠と房子を見較べてゐたが、何と思つ
 たのか、急に優しい笑顔になつて、
 「ところで何だ、其様な事はマア何うでも可いとして、急に房さ
 んに頼みがあつて歸つて来たんだが、聞いて呉れるかね」

小説家

終

大正元年八月一日印刷
 大正元年八月十日發行

小説家

著作
所
有

定價金四拾五錢

著者

稻岡奴之助

發行者

青木恒三郎

印刷者

堀越幸

東京市日本橋區通一丁目十七番地

大阪市西區阿波座二番町一番地

發行所

大阪市東區博勞町心齋橋角
振替口座大阪貳貳〇番

嵩山堂
電話園南千五百番

發行所

東京市日本橋區通二丁目角
振替口座東京貳貳八九番

嵩山堂
電話長本局七八九番

嵩山堂出版小説

全	全	全	全	全	全	全	全	浪六
金剛盤	夜叉男	大悪魔	仍如件	石田三成	當世女	うき舟	うき世車	煩悶病院
二册全	二册全	二册全	二册全	一册全	二册全	一册全	二册全	二册浪六
當世五人男内	最後の	當世五人男内	當世五人男	浪華名物男	うやむや日記	三人兄弟	毒婦	最後の岡崎俊平
上田力	黒田健次	黒田健次	當世五人男	浪華名物男	うやむや日記	三人兄弟	毒婦	岡崎俊平
三册全	二册全	三册全	二册全	三册全	一册全	二册全	三册全	二册浪六
赤蜻蛉	原田甲斐	日本武士	やまご心	武士道	明治十年	當世五人男内	當世五人男内	當世五人男内
一册	三册	一册	一册	二册	一册	吉田雄藏	川上三吉	倉橋幸藏
						二册	三册	三册

嵩山堂出版小説

全	全	全	全	水陸	全	全	美妙	小笠原 白也
戀の浮島	野蠻人	美人船	霧姫	飛ぶ人	金忠輔	女装の探偵	漁隊の遠征	妹
一册全	一册全	一册全	二册全	一册水陸	一册水陸	二册全	一册全	一册水陸
海底の寶庫	錨	大暗礁	荒鷺の爪痕	漁師の娘	稻妻銀行	二人女王	廢船萬里號	海底の噴火
一册全	一册全	二册全	一册全	一册全	一册全	一册全	二册全	二册水陸
秘密世界	誰が罪	空中飛行器	水車物語	黒雲	荒浪草紙	相模灘	女海賊	花
一册	一册	二册	一册	一册	一册	一册	一册	一册

嵩山堂出版小説

全	全	全	全	全	全	全	全	浪六
古賀市	鬼あざみ	大阪城	十文字	花車	品定め	浮世双紙	武者氣質	蕨之細道
一册全	一册全	一册全	二册露伴	一册全	一册全	一册全	一册全	一册浪六
五重の塔	勇魚捕	三保物語	新羽衣物語	後の海賊	海賊	呂宋助左衛門	魚屋助左衛門	草枕
一册全	二册小笠原 白也	一册眉山	一册全	一册全	一册全	一册全	一册全	二册露伴
見果てぬ夢	女教師	神出鬼没	眞西遊記	もつれ糸	雲の袖	ひざり寐	菊の濱松	さゝ舟
一册	一册	二册	一册	一册	一册	一册	一册	一册

嵩山堂出版小説

全	風葉	荷葉	萍水	春葉	秋聲	天仙	岡本	松田
罪	戀	反	山	山	地中之美人	善道邪道	紀文傳	脚本家
一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	二冊全	一冊風葉
玉	鬼	新	阿鼻焦熱	自殺と自殺	白浪女	女華族	唐撫子	寒
一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	二冊全	二冊全	二冊全	二冊風葉
奇	半	化粧くらへ	忘れがたみ	奴島田	横戀慕	罪のゆくへ	卯花緘	造船博士
一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	二冊	一冊	一冊

嵩山堂出版小説

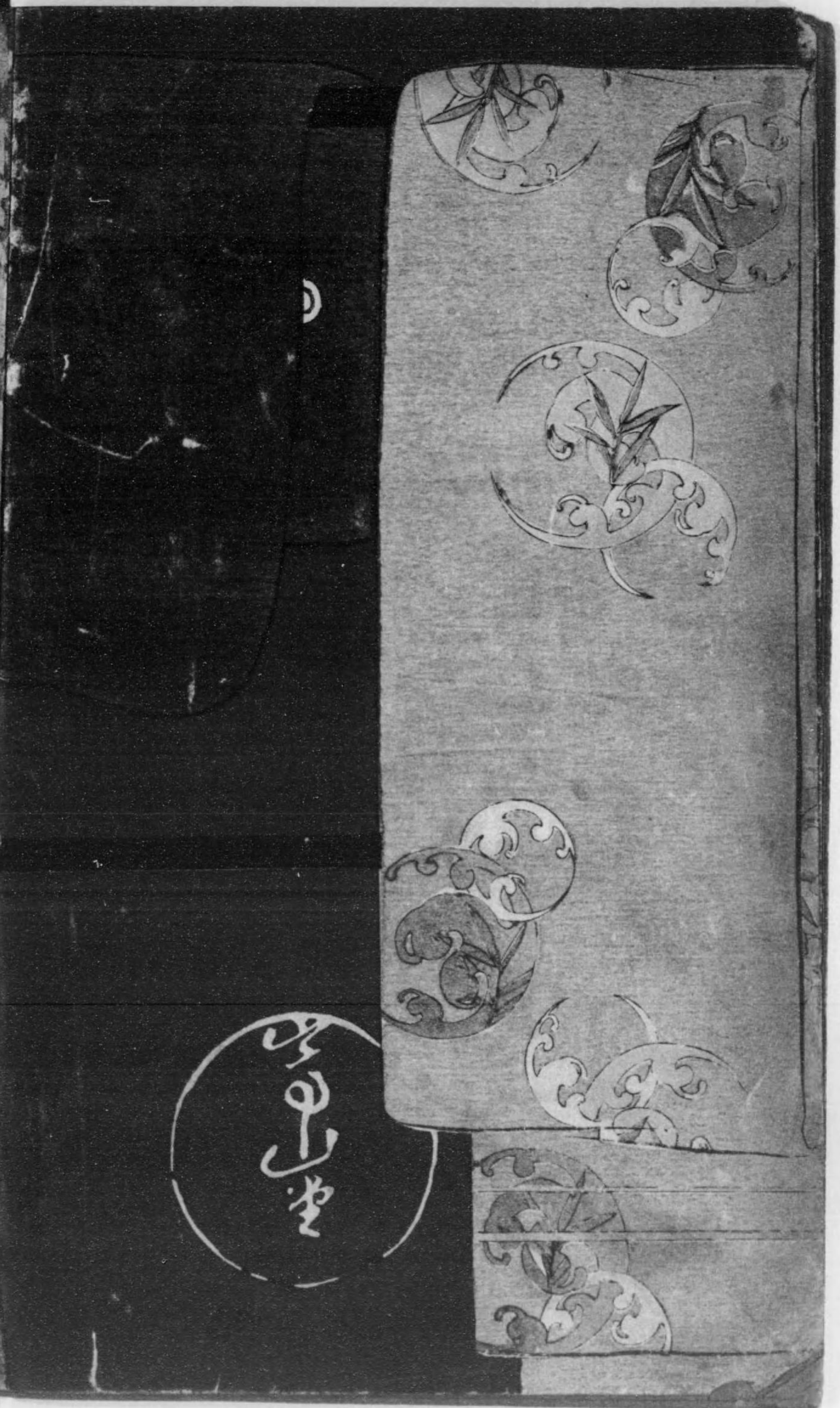
全	全	全	助之	全	全	全	全	水陸
罪のくやみ	海と陸	鬼の妻	家	汽車の大賊	海水浴	海國男兒	地中の秘密	秘密の使者
一冊全	二冊全	二冊全	二冊全	一冊全	一冊全	一冊全	一冊全	一冊助之
憐なる澄子	人の妻	三人書生	瘧	小英雄	小説乃公は偉いぞ	姉の仇	由井が濱	貴公子
一冊全	二冊全	一冊全	二冊全	二冊全	一冊全	一冊全	一冊全	二冊助之
獅子王	彌生物語	花山人	女の一心	雌龍雄龍	化物屋敷	金之冠	女可恐	惡魔
一冊	一冊	一冊	二冊	二冊	一冊	一冊	二冊	一冊

書雜版出堂山嵩

冠太 喜劇玉手箱 一册	洋水 新百物語 一册	及己 微笑 一册	斬鬼 名流百話 一册	讀賣 明治名士茶話 一册	家諸大 涼簞 一册	國武 機外觀 一册	藤原 山形 二星 鳴呼古遊君 一册	鹿島 西廂記 一册	美妙 博多小女郎浪枕 一册
百讀 妖怪府 一册	がなに 滑稽珍文 一册	お笑ひ草 一册	頓智百談 一册	滑稽三題噺 一册	滑稽落語集 一册	滑稽玉手箱 一册	子 子供芝居 一册	孤島 桃太郎 一册	平木 舞伎 一册
謙吉 偉人の尺牘 一册	藤城 慷慨家詩文歌評釋 一册	三熊 近世畸人傳 二册	小史 勤王家百傑傳 一册	全 先哲百家傳 二册	全 徳川時代の文學 一册	櫻所 明治百傑傳 一册	蓬艸 南朝北朝 一册	翠峰 おもちゃ文庫 一册	百讀 珍事奇談 一册

說小版出堂山嵩

全 源氏車 一册	全 歌枕 一册	全 からくり的 一册	全 丸腰銀次 一册	全 大喝采 一册	全 樂屋銀杏 一册	子仰天 紅筆双紙 一册	全 戀女房 一册	風葉 戀無常 二册
鐵腸 雪中梅 一册	近世歴史 大和の花 一册	近世歴史 筑波の月 一册	近世歴史 櫻田の雪 二册	全 玄雪姫 二册	全 煙草盆 一册	全 一夜畫工 一册	全 金剛武者 一册	松葉 無名城 二册
五圓 小説 五圓紙幣 一册	青軒 好男子 一册	吐芳 黒牡丹 一册	青萍 谷間の姫百合 二册	全 啞の旅行 一册	全 戦後の日本 一册	全 明治四十年の日本 一册	全 南海の激浪 一册	鐵腸 花開鶯 一册



سنة ١٢٠٤

1329
145

終